

第Ⅱ部

要素分類

深層・表層にはさまざまな要素が現れる。

第5章ではそれら諸要素を分類し、ある程度全体が見渡せるようにする。

第6章では、「形式実体」と「包含実体」の二種の特殊な実体を紹介し、

第7章では、動詞

第8章では、形容詞

第9章では、「連続描写詞」と「実体修飾第2描写詞」について

第10章では、助動詞について述べる。

第11章では、断定基について述べたあと、「で格の誕生」「本来の格」に触れる。

ここで行う要素分類は、また同時に品詞の分類でもある。ここでは、この文法の設定する個々の品詞が全体の中のどのような位置にあるものであるのかをも併せて示すことになる。

第5章

要素分類(品詞分類)

5.1 「詞」と「語」

「詞」……この文法では、形態素を「詞」と呼んでいる。形態素とは、それ以上分解すると意味が消失してしまうような、意味を担う最小の単位である。

たとえば「行く」という語は、yuk-u というふうに2つの部分に分けることができる。yuk- も -u も意味を担う最小の単位で、形態素である。したがって、両者とも「詞」である。

「詞」にもいくつかの種類がある。どのような種類があるのかは、表5-2～表5-6に示してある。たとえば、yuk- という詞が「動詞」であり、-u という詞が「描写詞」であることは、それらの表から見てとれる(「描写詞」は「変換詞」と呼んでもよい。「2.6 属性名表示」参照)。(「-」を「結合手」と呼ぶ。)

「語」……ところで、yuk- も -u も、そのままの单一の形では実際のことばとして使用されることはない。両者は相互に結合して、yuk-u となって表層化する。表層では、こうなってはじめて安定した単位体となる。このような、表層で安定する最小の単位体を「語」と呼ぶこととする^{*1}。

yuk-u は、動詞が中心の「語」であるから、「動詞語」と呼ぶのが適当で

*1 これは「語」の第一段階での定義である。第二段階では、語と詞・語が「併合」して「見かけの詞・語」を形成する。併合記号を「=」とし、「併合手」と呼ぶことにする。 例： yuk-u=e- (行方 …… 「見かけの詞」)
yuk-u=e-o (行方を…… 「見かけの語」)

あろう。

「動詞語」の場合は、「動詞」と「描写詞」が結合して「語」を形成している。一方、これとは異なる種類の「語」もある。たとえば *kao-* (顔) という名詞的実詞は、深層では必ず主格か客格かの格に立っている。表層化されるときには、省略されることがあるにもせよ、必ず *-θ₁*, *-ga*, *-o*, *-ni* 等、何らかの格詞を伴う(例：*kao-ga*)。また、格詞(例：*-ga*)の方もそれだけでは表層には存在できない。つまり、名詞的「実詞」と「格詞」は結合してはじめて表層の単位体「語」となる(例：*kao-ga*)。「実詞-格詞」という形で語が形成されるわけだが、これは「実詞語」と呼ぶのが適当である。このように「実詞語」は「動詞語」とは様相を異にしている。(このほかに、「形容詞語」「全体描写語」がある。)

5.2 4要素……構造への関わり方で要素を4種類に分類する

それでは、諸要素を分類してみることにする。大別すると、2つのグループになる。「構造を作る要素」と「構造を読む要素」である。(これは、ハード的要素とソフト的要素としてとらえることもできる。)

「構造を作る要素」は、さらに3つのグループに分けられて、①「実体」と、②「属性」と、③「格」とになる。「構造を読む要素」は④「描写法」の1つである。それぞれに記号を与え、① J, ② Z, ③ K, ④ B とする。諸要素は、つまり、①～④の4つの要素に分類することができる(表5-1)。

表5-1 (要素分類)

要素	構造を作る要素	①	実体	J
		②	属性	Z
		③	格	K
	構造を読む要素	④	描写法	B

表5-1を、それぞれの要素に対応する「詞」を用いて書き改めれば、表5-2のようになる。表5-2にはさらに下位分類とその記号を書き加えておく。

表5-2

(品詞分類)

詞	構造を作る詞	①	実 詞 J	実詞（非包含実詞）	Ji
				包含実詞	Jh
		②	属性詞 Z	動詞	Zd
				形容詞	Zk
				態詞	Zt
				助動詞	Zz
		③	格 詞 K	否定詞	Zh
				主格詞	Ks
		④	描写詞 B	客格詞	Kk
				全体描写詞	Bz
				部分描写詞	Bb

次に、①～④の各詞について簡単に触れておく。詳しくは章を改めて述べることになる。

① 実詞……実詞は実体に対応する。いわゆる、名詞、形容詞語幹、形容動詞語幹、多くの副詞、がこれに当たる。実詞の結合手（-）は、原則的に格詞との結合をめざす（融合、併合をめざす場合もある）。

実詞の分類の基準にはいくつかあって、まず、包含実詞と非包含実詞とに分類される。次に、対応する実体が構造の上で形容実体になるかどうか、どの格に立つか、実質的であるか、形式的であるか等によっても分類される。

② 属性詞……属性詞には表5-3に示すようなものがある。

属性詞の結合手（-）は、最終的に描写詞（下線部）を要求する。

例： nom-oo, nom-as-u, nom-as-e-reba

表5-3 (属性詞)

動 詞	A	sak-, nobor-, mi-, tabe- など
	B	demo. r-, iki.m-, omosiro. gar- など
	C	駐車=S-, 評=S-, 論=Z- など
形容詞	aka. k-, tuyō. k-, tadasī. k-, na. k- など	
態 詞	-(s)as-, -(r)ar-, -e-	
助動詞	=(ma)s-, =t(e)-, =a(r)-	
否定詞	-(a)na. k-, -(a)n-, -en-, -(a)z-, =na. k-	

③ 格詞……主格詞と客格詞がある。

表5-4 (格詞)

主格詞	-Ø₁, -ga₁, -ga₂
客格詞	-o, -ni, -e, -de, -to, -kara, -yori, -made, -Ø₂

④ 描写詞……〔全体描写詞〕と〔部分描写詞〕がある。

〔全体描写詞〕……構造を構成する個々の要素とは直接的な関係がなく、構造全体のあり方の描写に関わる詞。

表5-5 (全体描写詞)

構造の認定に関わる描写詞	はい, うん, いいえ, いや か, ね, ぞ, よ, とも
種々の構造の存在を暗示する描写詞	おい, え, こら, バイバイ, さあ, どっこいしょ, ええと

第Ⅱ部 要素分類

[部分描写詞] ……構造を構成している個々の要素と直接的に関わる詞。

表5-6 (部分描写詞)

属性描写詞	基本描写詞	- (r) u	- i
	実体修飾第1描写詞	- (r) u	形 - i
	実体修飾第2描写詞	- (i)	容 - u
	連続描写詞	- (i)	詞 - u
	条件描写詞（条件基）	- (r) eba	に - ereba
	命令描写詞	- e / - ro	結 /
	実現見込み描写詞	- (y) oo	合 (-aroon)
	非実現見込み描写詞	- (u) -mai	/
	展開描写詞（条件基）	基に結合	- a (ba)
相対化描写詞	他実体随伴描写詞	も, さえ, でも, だって	
	他実体排除描写詞	こそ, さえ	
	自実体排除描写詞	しか	
	実体ふちどり描写詞	は	
実体間描写詞	実体つなぎ描写詞	の, + (プラス) (A16.1参照)	
	同格実体列挙描写詞	と, に, や	
待遇描写詞		お, ご, 様, ちゃん	など

5.3 文は4要素で構成される…… J-K Z-B

日本語の文は以上の「実詞 J」「属性詞 Z」「格詞 K」「描写詞 B」という4要素で構成されている。

たとえば、「月が出る。」という文は、次のような形で詞に分解できる。

tuki-ga de-ru (月が出る)

これを記号で表せば、次のようになる。

J-K Z-B (詳細表記では Ji-Ks Zd-Bb)

これで、文が J-K Z-B (実詞－格詞 属性－描写詞) という 4 要素で構成されていることが確認できる。

同様に「ここに花が咲いている。」

koko-ni hana-ga sak-i-te-Ø=i-ru (ここに花が咲いている)
は、次のように記号化できる。

J-K J-K Z-B=Z-B=Z-B

(詳細表記では Ji-Kk Ji-Ks Zd-Bb=Zz-Bb=Zd-Bb)

やはり 4 要素で構成されていることがわかる。

ところで、以上の記号表記に見ることができるように、J は必ず K と結合し、Z は必ず B と結合する。

J-K Z-B (実詞－格詞 属性－描写詞)

これが基本であり、文の中ではこれが単位となる。「語」である(5.1参照)。

J-K は名詞語(-B を伴うこともある)である。

Z-B は動詞語及び形容詞語である。(両語に =Z-B という形で組み込まれる助動詞を含む場合もある。)

この基本を逸脱することはない。これは、実体は必ずいずれかの格にあり、属性は必ず描写詞を伴って描写されるという事実を反映している。

K に相当する詞は省略されることがある(水_飲む)、また、B に相当する詞は音韻的な理由でゼロ化することがある(tabe-Ø=hazime-ru)が、しかし、要素としての K や B が失われるわけではない。

また、J-K は B を伴うことがあり、Z-B はいくつか重なることがある。Z が重なることもあるが、その場合でも最後は Z-B の形になる。文末は Z-B になる。

これを確認するための参考として、いくつか例を挙げておく。

これはきのうの新聞だ。

Kore-Ø₁-wa kinoo-Ø₂-no shinbun-d=a-Ø
J-K-B J-K-B J-K=Z-B

彼は去年車体の赤い車を買った。

Kare-Ø,-wa kyonen-Ø₂ syatai-Ø₁-no aka.k-i kuruma-o kaw-i=t-Ø=a-Ø
J-K-B J-K J-K-B Z-B J-K Z-B=Z-B=Z-B

ボクは毎日彼がしかられるのを見ます。

Boku-Ø,-wa mainiti-Ø₂ kare-ga sikar-ar-e-ru no-o mi-Ø=mas-u
J-K-B J-K J-K Z-Z-Z-B J-K Z-B=Z-B

わたしは歌が歌えないでの手品をします。

Watasi-Ø,-wa uta-ga uta-e-na.k-i no-de tezina-o s-i=mas-u
J-K-B J-K Z-Z-Z-B J-K J-K Z-B=Z-B

5.4 「文」とは何か

「文」をまず次のように定義する。これを第1段階での定義とする。

「文」とは深層の判断構造を自己(の表層一意識層)に向か、あるいは他者に向けて伝達するための表層形式である。

このように定義すると、構造の伝達が目的であるから、音声によろうと身振りによろうと、どのような形であっても、伝達ができるのであれば、その形が「文」だということになる。

構造の伝達法には2種類あるので、それに対応する「文」には2種類のものがあることになる。

①「構造要素伝達文」……構造の構成要素を一つずつ描写して伝達するタイプの文

②「構造存在伝達文」……その判断構造が存在していること自体を、構造の構成要素とは関係なく、一定の描写詞で描写するタイプの文この2種類である。

②の「構造存在伝達文」から考える。たとえば、ある猿が、危険の迫ったことを内容とする判断を行い、これを他者に伝達するために、猿同士に理解できるある叫び声を上げたとすれば、これは上の定義にかなうから「文」で

あることになる。

逆に、ある人が、ふだん歌いなれた歌を何の気なしにちょっと口ずさんだ場合は、歌そのものは歌詞という形である内容をもっているとしても、それはその人のそのときの判断構造を伝えるものではないのだから、その歌は「文」ではなく単なる発声にすぎないことになる。(もっとも、自分はいまリラックスしているのだ、という判断を自己あるいは他者に伝達するような場合であれば「文」ということになる。)

この②のタイプの伝達に使用される日本語の表層形式は、描写詞のうちの「全体描写詞」(一部を除く)(表5-5)である。

②のタイプは、ある構造が存在していることを伝達しようとする形のものなので、「構造存在伝達文」という名になっている。

一方、①の「構造要素伝達文」は、深層の構造の要素と表層の言語形式が逐一対応する形のものであり、構造を正確に伝達し、聞き手にその構造を正確に再現してもらうのが目的となっている。「日本語構造伝達文法」が解明しようとしているのが、このタイプの伝達法のしくみである。

この①のタイプでの文の定義というものもありうる。これを第2段階での定義とする。

「文」とは深層の判断構造の正確な再現を目的に、構造の要素を手順に従って描写したものである。文としての要素配列の基本は J-K Z-B の形式である。

正確な再現が目的とはいっても、構造のすべてを描写するわけではなく、状況によって省略できるものは省略する。

さまざまな変化形式はありうるが、文としての基本形式は J-K Z-B という詞順である。

構造を伝えようとする表層形式はすべて文である(第一段階定義)が、特に、手順に従って構造の要素を逐一描写するものが典型的な文である(第二段階定義)。

第6章

実体(実詞)

実体(実詞)については 1.2 「主体、客体はともに実体」で述べた。ここでは「形式実体」(特に「形式実体A」)と「包含実体」を取り上げる。

6.1 形式実体

形式実体として分類されるものには、A～Eがある。

[形式実体A] (無属性実体)……属性の盤に穴をあける。実体の欠如として機能する。

「なに」「どれ」「どこ」「だれ」「いつ」「なぜ」「いくら」「どっち」「どちら」「どう」等

[形式実体B] (单一属性実体)……それだけでは空であるが、その時の属性に支えられて、実体として機能する。

「なにか」「どれか」「どこか」「だれか」「いつか」等
([形式実体A] の「穴」が「か」によって充てんされたもの。)

[形式実体C] (状況依存実体)……それだけでは空であるが、状況の中で属性が充てんされて、実体として機能する。

「これ」「それ」「あれ」「ここ」「そこ」「あそこ」「いま」「今日」「明日」「今年」「去年」／「自分」等
(平板型アクセントで、「例のもの」という意味の)「なに」

[形式実体D] (話者依存実体)……それだけでは空であるが、話者がだれで

あるかが決定することによって属性が充てんされて、 実体として機能する。

「私」 「あなた」 「彼」 「彼女」 「僕」 「君」 等

[形式実体 E] (無名代用実体)……通常の実体の代わりに置かれる。

「の」 (「の」は実体名ではなく、 機能名。36.6参照)

6.2 形式実体 A

「形式実体 A」というのは、 疑問詞のことである。疑問詞をどうモデル化するのかを考える。(ここでは「だれ」をとりあげるが、 他のものもこれに準ずる。)

1) 疑問

「だれが歌う？」という文がある。この文に関して、 2つの疑問がある。

- ① 常に「だれガ歌う？」である。なぜ「だれハ歌う？」というふうに、
ガをハに換えることができないのか。
- ② なぜこの文には答えなければならないのか。

2) 説明

「だれ」というのは「実詞」であって、 判断構造においては「実体」である(1.2参照)。しかし、 これは普通の実体と似てはいても、 同じものとして扱うことはできない。次のような特徴があるからである。

ア 属性を取り出すことができない。

イ 答えなければならない。

たとえば「犬」と名付けられている実体からは、「動物だ」とか「ほえる」とか「走る」とか、 いくつもの属性を即座に取り出すことができる。「犬」のような普通の実体は、「属性の集合体」であることができる(1.1の注及び2.2 1) 参照)。

一方、「だれ」と呼ばれる実体は、 属性を取り出そうとしても、 ほとんどなにも出てこない。これは、「だれ」が「属性の集合体」ではなく、 属性の

ない、形式だけの実体、「形式実体A」(「無属性実体」)であるからである。

属性のない、形式だけの実体であれば、構造モデルは図6-1,-2 のようにするのが適当である。図6-1 は「だれ」が主格にある場合の、図6-2 は「だれ」が客格にある場合の構造図である。普通なら実体の円柱が立つべき所が、空になっている。

「形式実体A」は、このように、属性の盤にあたかも透明な実体が立ったかのような穴をあけるところに特徴がある。したがって、「だれ」は属性の盤にあいた穴(実体の欠如)としてモデル化できる。

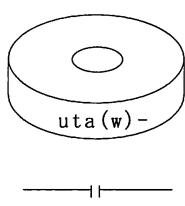


図6-1 だれが歌う

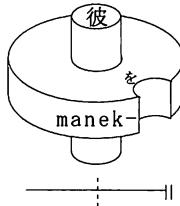


図6-2 (彼は)だれを招く

「だれ」をこのような穴とすると、次のような説明が可能となる。

第一に、「だれ」は、穴であるから、属性の盤の設定以前に独立して存在することができない。つまり、実体「だれ」の設定は、属性の設定と同時であるか、遅れるかのいずれかである。それで、実体が主格にある場合は、その主格は第1主格ではなく、第2ないし第3主格であることになる。(主体と属性の論理的な設定順序と格表示の関係については 2.2 参照)。

したがって、主格の「だれ」は常に主格詞「が」をとり、「の」をとらないことになる。(「だれ_歌う。」というふうに、「が」が省略されることはあり得るが、これは本質的なことではない。)

また、穴であるから、「ふちどりのリボン」をまきつけたり、スポットライトをあてたりすることはまずできない。それで、普通は、「だれ」が「は」をとることができないのである(3.1③ 参照)。

このことは、主格の場合にはもちろん、客格の場合にもあてはまる。

「だれ」が主格の場合……通常「だれハ歌う？」とは言わない。

「だれ」が客格の場合……通常「(彼は)だれハ招く？」とは言わない。

これが、疑問①「なぜ常にガであり、ガをハに換えることができないのか」に対する構造伝達文法式の説明である^{*1}。

第二に、属性の盤に穴があいた状態というのは不安定な状態で、その穴は埋められる必要がある。そこに立つべき実体を補うことが要求される。この要求が回答を促す結果となる。これは、「だれ」が主格、客格のいずれの場合にもあてはまる。

だれが歌う？ → 林さんが歌う。（主格実体^{*2}を補う）

だれを招く？ → 森さんを招く。（客格実体を補う）

これが疑問②「なぜ答えなければならないのか」に対する構造伝達文法式の説明である^{*3}。

6.3 包含実体……構造を内蔵する実体

次に包含実体について説明する。

いま、連体修飾節によって修飾された実詞がここにある。

① 彼が nor-u バス （図6-3）（4.2 2）実体修飾描写 参照。）

② 彼が バスに nor-u こと

①では実詞「バス」が修飾されており、②では実詞「こと」が修飾されている。この2つの詞の、属性詞 nor-との関係を見ると、①の「バス」の方は nor-に対して格関係（に格）にある（①'）一方、②の「こと」の方は nor-に対して何の格関係もない（②'）。

①' 彼が バスに nor-u

②' 彼が バスに こと? nor-u

*1 『岩波古語辞典』p. 1496 にはこうある……『は』は、すでに明確である物や事を承けるという性質を持つのが原則で、不明なもの、疑問詞などは承けないのである。

*2 「林さんが歌う」……この「が」は、第3主格（「が₂格」）である。

*3 構造伝達文法の特徴の一つは、実際にことばとして現れた表層形式がなぜそのようであるのか、その理由を深層の判断構造から説明しようとする点にある。構造伝達文法は説明文法であることをめざしている。

実詞「こと」は、「彼が バスに nor-u」という構造全体を実詞化(名詞化)する機能をもっている。この、ある構造全体を実詞化する機能をもつ実詞は、構造においては属性(nor-u)と格で関係せずに「包含」の形態で関係している。図6-4に示すように、「こと」という実体(円柱)が「彼が バスに nor-u」という一つの構造全体(図6-3)を包み込むのである。

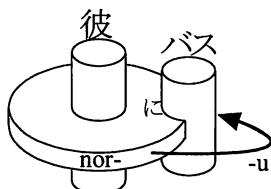


図6-3 彼が nor-u バス

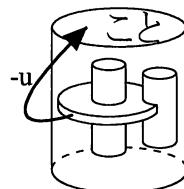


図6-4 彼が バスに nor-u こと

(実体修飾描写詞 -u は、矢印で表示する。4.2 2)参照。)

この「こと」のような実体を、「彼」「バス」のような普通の実体と区別するために、「包含実体」と呼ぶことにし、「彼」「バス」のような普通の実体を「非包含実体」と呼ぶことにする。そして、「包含実体」の中に包み込まれる構造を「副構造」と呼ぶことにする。

「包含実体」は、このように、ある構造(副構造)を包含している一方、実体であるので、当然のことながら、全体構造の中では一つの実体として機能する。たとえば、

彼が バスに nor-u ことは きのう 聞い(た) (kik-i-t-a*)

という表層文の中では、包含実体となっている部分「彼が バスに nor-u こと」が一つの実体として主構造の中に位置をとる。図6-5, -6 のとおりである。

包含実体は構造を他の構造に組み込むためのカプセルのようなものである、といえる。

*1 -i-t-a の部分は、第10章「助動詞」、特に 10.5 完了基 参照。

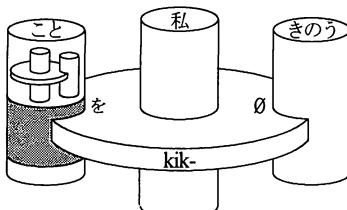


図6-5

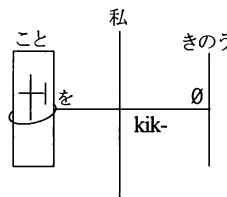


図6-6 簡略表示

(「こと」に巻き付いているリボン・輪は「は」を表す。3.1③参照。)

このような包含実体であるのは「こと」だけではない。「ところ・もの・わけ・ため・つもり・とき・まえ・あと・はず・らし・よう・結果・ほう」等々のカプセルがあり、それぞれにこのような名前が付いている(国語文法の「形式名詞」などがこれに当たる)。そして、さらに「ø包・の」がある。

6.4 包含実体の意義……なぜ文の名詞化が必要なのか

包含実体は構造を実体化する機能をもつたが、このような実体化という手続きはなぜ必要なのであろうか。この問いは、表層文のレベルで、「なぜ文を名詞化する必要があるのか」という形で問い合わせ直すこともできる。

この問いには、「構造を関係の中に置くためである」、あるいはより正確に「構造を他の構造の中に置くためである」と答えることができる。

6.3で見たように、たとえば

① 彼がバスに乗る (図6-3)

という一つの構造がある場合、この構造はこれで完結する独立した構造である。これを

② (その情報)を私はきのう聞いた

という構造の中に位置づけるためには、実体化(名詞化)して、②の属性「聞く」の「を格」に置けるようにする必要がある。

私は [彼がバスに乗ること] をきのう聞いた。 (図6-5)

このように、一つの独立した構造は、実体化してはじめて他の構造の中に位置を占めることができるようになるのである。ここから、

構造を実体化するのは、その構造を他の構造の中に置くためである
という言い方が導き出される。だから、
構造を包含実体の中に組み入れるのは、その構造を他の構造との
関係の中に置くための準備である
ということができる。

これを表層レベルのこととして言い換えれば、
文を名詞化するのは、その文を他の文の一部とするためである
あるいは、
文を名詞化するのは、その文を他の文との関係に置くためである
ということになる。

だから、たとえば、
彼がバスに乗る の

という形で一つの構造が実体化されていれば、それは、この構造を他の構造
との関係の中に置く意図の表れであるとみなすことができる(37.1③)。

次に、では、どのような包含実体によって、どのような関係がもたらされ
るのか、ということが新たな疑問となる。

包含実体にはさまざまなものがある(6.3)から、使用する包含実体によっ
てさまざまな関係がもたらされる。たとえば「ところ・とき・まえ・あと」
などによって時間的な関係が、「ため・から・結果」などによって因果の関
係がもたらされる。また、汎用性の高い「の」によって、さまざまな関係が
もたらされる。詳しくは章を改めて述べることになる(包含実体「の」につ
いては36.8, 9 及び 37.1, 2参照)。

6.5 包含実体内の主格……が、格

ところで、副構造(包含実体内の構造)は、包含実体の中に入る時点で、す
ぐに成立し、確定した一体の構造になっているものと考えられる。それで、
副構造では、主体と属性の設定に先後関係が考えられない。つまり、主体と
属性の設定が同時であるものとみなせる。ということは、副構造では主体が

第2主格(が格)にあることを意味しており、それはすなわち、連体修飾節内では主語が「 \emptyset_1 」によってではなく、「が」によって格表示されることを意味している*1(2.2参照)。

なお、形式断定基(11.4)における形式的な包含実体である場合などは事情が異なっている。

6.6 ゼロの包含実体……名前のない包含実体

次のような文がある。

彼に $a(w)-u$ には 予約が $ir-u$ 。 (彼に会うには予約が要る。)

この文では「彼に会う」全体(図6-7)が、格詞「に」を伴って、実詞(名詞)として機能している。しかし、「会う」は属性(動詞)であり、このまま実体として扱うことはできない。そこで、ここに「ゼロの包含実体」を見いださざるをえない(図6-8)。

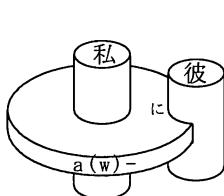


図6-7 私 \emptyset_1 彼に $a(w)-$

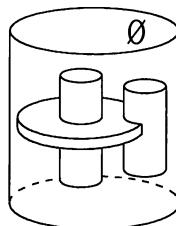


図6-8 ゼロの包含実体

「ゼロの包含実体」とは、つまり、「こと」とか「もの」とかという呼び名をもたない包含実体のことであり、これを \emptyset 包と表示することにする。普通の包含実体と異なり、意味をもたず、構造をそのまま実体化する。

彼に $a(w)-u$ \emptyset 包 には 予約が $ir-u$ 。

$a(w)-u$ の $-u$ は実体修飾描写詞である。

この文の構造を図示すれば、図6-9、-10 のようになる。

*1 なぜ従属節の主語が「 \emptyset_1 」ではなく「が」をとるのかの、構造伝達文法式の説明である。

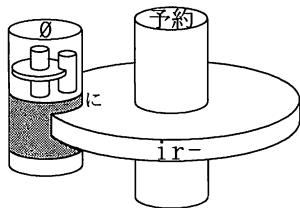
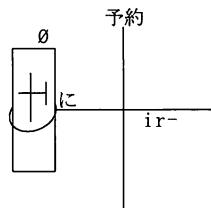


図6-9 彼に a(w)-u ø包 には 予約が ir-u 図6-10



ゼロの包含実体が見いだされる例として、いくつかの文を挙げておく。

北海道へ行くø包よりハワイへ行く方がいい。 (より格包含実体)

聞くø包は一時の恥、知らぬø包は一生の恥。 (主格包含実体)

一度彼女と話してみるø包がいい。 (主格包含実体)

6.7 包含実体構造例

包含実体の構造例を示しておく。

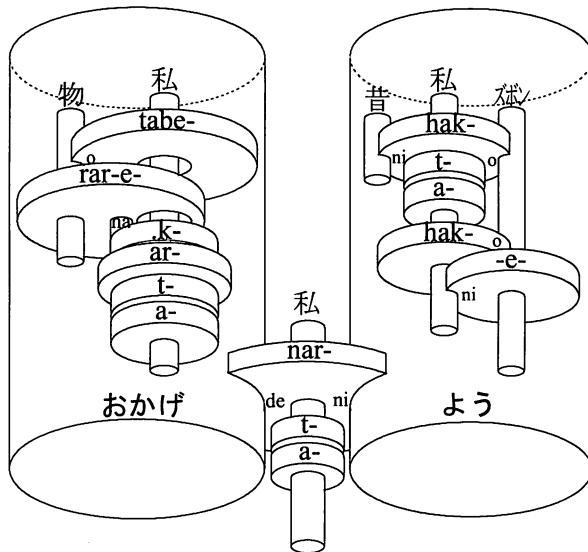


図6-11 物を食べられなかったおかげで、昔のズボンがはけるようになった。

(「物が食べられ～」の場合は否定構造が「物」を主体とすることになる。)

第7章

動詞

動詞には次のように、「動詞A」「動詞B」「動詞C」を設定する。

7.1 動詞A sak- (咲く), mi- (見る) のような、本来的な動詞を動詞Aとする。この中には次の「する」「来る」も含む。

いわゆるサ行変格活用動詞の「する」は、動詞(いわゆる語幹)そのものが s-, si-, sur-, se- と形態変化する。このことを示すために大文字の S- を使って表示することにする。

同様に「来る」も、動詞が k-, ko-, kur- と形態変化するので、大文字で K- と表示する。

この S- (する) と K- (くる) を「形態変化動詞」と名づける。

7.2 動詞B kumo. r- (曇る), tuka. m- (つかむ), haru. mek- (春めく) のような、分析によって実詞を取り出すことができる動詞を動詞Bとする。

実詞を取り出した後に残る r-, m-, mek- の部分はやはり形態素であり、詞であるわけであるが、構造上においてでさえこれだけでは存在せず、必ず実詞を伴う(図7-1, -2)。

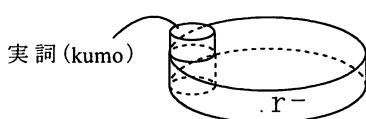


図7-1 くもる

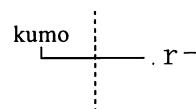


図7-2 くもる

実詞を伴って初めて、構造上に存在しうる単位となり、通常の詞となる。

それで、このような詞を、通常の詞と区別するために特に「辞」と呼ぶことにする。(ここでの「辞」は「動辞」である。)

「辞」は「詞」と「融合」して新たな「詞」を形成する。

「動詞B」は「融合」によって形成される動詞なので、「融合動詞」とも呼ぶことにする。「融合」を表示するのに記号「.」を使用する。

融合動詞は次のように構成を表示することができる。

融合動詞 = 実詞 . 動辞 -

くもる = kumo.r-

natukasi.m- , toki.mek- なども融合動詞である。

『発展A』 A17. 1④融合 参照

7.3 動詞C 「～する」の形の動詞

「駐車する」「評する」のように何らかの実詞と、動詞「する」が結びついて一つの動詞のようになったものを動詞Cとする。

たとえば「駐車する」は「駐車をする」とも言えるように、実詞(駐車)は「を格」に立って、動詞「する」と併合(5.1注参照)している。「駐車-を」すでに語になっていて、これに S- が「併合」して「みかけの詞(5.1注参照)」を形成している。これを、駐車=S-(駐車-を=S-と同じ)のように表示する。「評する」「論じる」等もこれと同じ扱いにする(「する」そのものについては、7.1参照)。

『発展A』 A17. 2⑫併合 参照

構造図示は図7-3, -4のようになる。

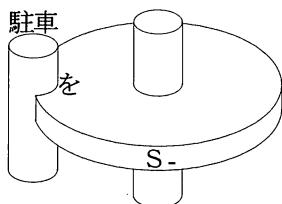


図7-3 駐車=S-

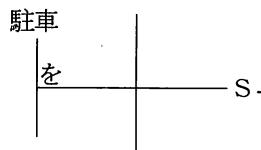


図7-4 駐車=S-

第8章

形容詞

8.1 形容詞のモデル化

形容詞は構造上では形容属性を形成している。ここでは、形容詞（形容属性）の扱い方について述べる。

たとえば、*siroi*(白い)という形容詞を例にとれば、これを *siro*. *k-i* のように分析し、*siro* を実詞、*k-* を形容辞^{*1}、*-i* を描写詞とする。

siro(実詞)と *k-*(形容辞)は「融合」(.)によって「形容詞(形容属性)」を形成するものと考える。(「融合」については、7.2「動詞B」を参照。)

「形容詞」を構成する実詞を特に「形容実詞」と呼ぶことにする。

$$\text{形容詞} = \text{形容実詞. 形容辞 -} \\ \text{siro. } k-$$

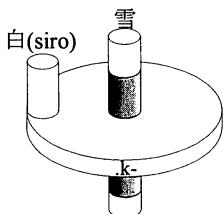


図8-1

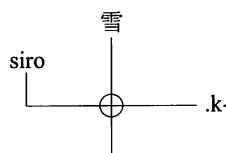


図8-2

8.2 「基本描写詞」と「実体修飾描写詞」

-i を描写詞とするのであるが、これには2種類ある。「基本描写詞 *-i*」

*1 「辞」とは実詞を伴って初めて構造上に存在しうる単位となる形態素である。何らかの詞と融合して新たな詞を形成する(7.2 動詞B参照)。

と「実体修飾描写詞 *-i*」である。

「基本描写詞 *-i*」は

雪ゆきは白しろ*i*(*siro. k-i*)。

のように、ある構造の描写が完結したものであることを示す機能がある。

「実体修飾描写詞 *-i*」は

白しろ雪ゆき (*siro. k-i 雪*)

のように実詞(名詞)を修飾する機能がある。この機能は図8-3, -4のように矢印で表示される。

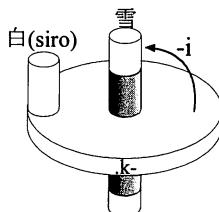


図8-3 白い(*siro. k-i*)雪

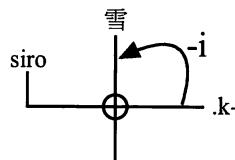


図8-4

なお、「実体つなぎ描写詞ノ」については 8.4③、「連続描写詞 *-u*」については 9.1、「実体修飾第2描写詞 *-u*」については 9.2 を参照。

8.3 形容辞(. *k-*)のゼロ化

形容辞(. *k-*)は、*-i* による描写(基本描写、実体修飾描写)ではゼロ化する。このゼロ化を「。」の記号で表示する。

<i>siro. k-i</i>	<i>taka. k-i</i>	<i>sugasugasi. k-i</i>
(しろい)	(たかい)	(すがすがしい)

-u, *-ereba* による描写では、このゼロ化は生じない。

<i>siro. k-u</i>	<i>taka. k-u</i>	<i>sugasugasi. k-ereba</i>
(しろく)	(たかく)	(すがすがしければ)

ただし「ございます・ございません」が続く場合はゼロ化しうる。

<i>siro. k-u</i> (しろう)	<i>taka. k-u</i> (たこう)
------------------------	------------------------

8.4 形容実詞の名詞的独立性

形容実詞の名詞的独立性には段階がある。いくつかの段階の例を挙げる。

① 形容実詞がそのまま名詞であるもの

siro. k-(白), aka. k-(赤), maru. k-(丸), sikaku. k-(四角),
sibu. k-(渋), zuru. k-(狡), waru. k-(悪)

② 形容実詞がそのまま感動を表すのに用いられるもの

ita. k-(痛!), atu. k-(熱!), samu. k-(寒!), kusa. k-(臭!)

③ 形容実詞が「の」を伴って他の実詞を修飾するもの

natukasi-no(なつかしの歌声), naga-no(永の別れ)

omosiro-no(おもしろの雪景色), itosi-no(いとしのエリー)

uruwasi-no(うるわしのサブリナ)

この構造を図示すれば、図8-5, -6のようになる。「の」は実体つなぎ描写詞であり、矢印で表示する(4.2.3))。

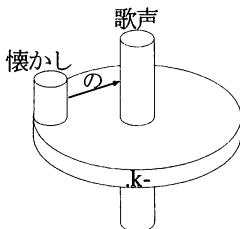


図8-5 懐かしの歌声

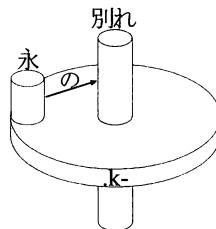


図8-6 永の別れ

④ 形容実詞としてしか機能しないもの

ko. k-(濃い), tuyo. k-(強い), hidu. k-(ひどい)

8.5 形容基(. k-Ø=ar-)

たとえば完了基(た)(10.5)は、形容属性(siro. k-)に動属性 ar- を加えたものに付加される(10.6)。

siro. k-Ø=ar-i=t-Ø=a-Ø (しろかった)

この、形容属性に ar- を加えたものを「形容基」と呼ぶ。

xxxxx. k-Ø=ar-

という形式をしている。形容基は擬似動詞である。

「基」とは、詞がいくつか集まって一つのまとまりをなし、全体として一定の構造形式と意味を保つものである。

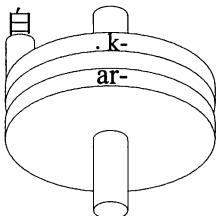
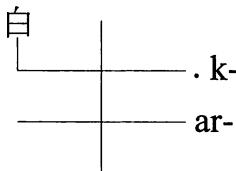
図8-7 形容基 siro.k-ø=ar-

図8-8

8.6 形容属性丁寧化基（「いです基」）

形容属性を丁寧な形にしようとするときは、「白いです」のように「です」を使う。ここで使用される「です」を「形容属性丁寧化基」と呼ぶことにする。（「です」は 11.1④ に述べるように、「であります」と同じ構造をしている。）

「形容属性丁寧化基」は次の形式をもっている。

$-i=\emptyset-de=ar-i=mas-$ (例 : shiro. k-i=∅-de=ar-i=mas-)

$-i=\emptyset-de=\emptyset-\emptyset=s-$ (例 : shiro. k-i=∅-de=∅-∅=s-)

(mas- については 10.2 を、 de=∅-∅=s- については 11.1 を参照。)

そこで、下線部をもとに、この基を簡単に「いです基」と呼んでもよいだろう。

この基の構造は図8-9, -11のように図示できる。この基構造の要素の一つである包含実体 \emptyset の中に、たとえば「雪は白い」という構造を入れれば「雪は白いです」となり、丁寧化できる(図8-10, -12)。

「白い siro. k-i」が包含実体 \emptyset につながるのは、もちろん「実体修飾描写 -i」の機能(矢印表示)による。

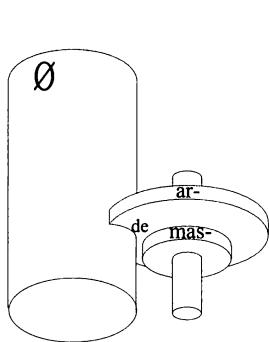


図8-9 形容属性丁寧化基(いです基)

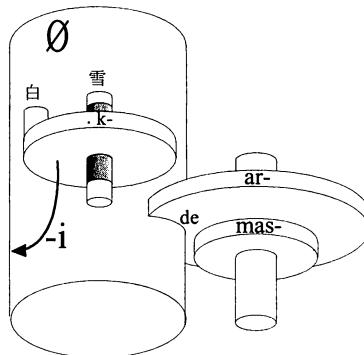


図8-10 雪は白いです

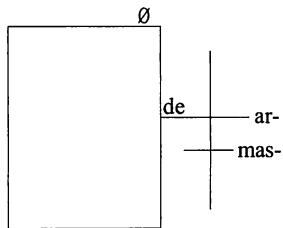


図8-11 「いです基」簡略表示

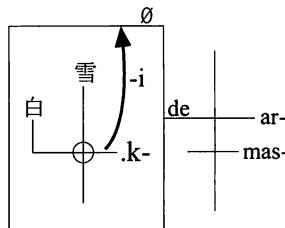


図8-12

この「いです基」はこのまま固定しているので、断定基「です(11.1④)」ほどの自由度がない。断定基「です」と異なり、「だ」の形式での省力描写や、否定属性-en-の付加、完了基の付加等ができない。

断定基の「です」なら、

「本です」 → 「本だ」

「本です」 → 「本ではありません」

「本です」 → 「本でした」

とすることができるが、

いです基は、

「白いです」 → 「*白いだ」

「白いです」 → 「*白いではありません」

「白いです」 → 「*白いでした」

とすることはできない。(ただし、「白いでしょう」は可能である。)

この形容属性丁寧化基の使用が日本語で認められるようになったのは比較的新しいことである。『助詞助動詞詳説』(p. 300)によれば、昭和10年代後半でも可否が論じられており、昭和27年の「これから敬語」で積極的に認められるようになった、という。

◎ 学校文法の「形容動詞」については p. 177(注) 参照。

学校文法の形容詞活用形

形容詞(aka. k-)は形容実詞(aka)と形容辞(. k-)より構成されている。また、形容基(aka. k-Øu=ar-)は形容詞と動詞 ar-とで構成されて、擬似動詞となっている。この両者に描写詞が適用されて語となる。学校文法での活用形は次の下線の部分をとらえている。

形 式 の 種 類		形 式	学校文法
形容詞 aka. k-	+連続描写詞	<u>aka. k-u</u>	連用形
	+実体修飾第2描写詞	<u>aka. k-u</u>	連用形
	+基本描写詞	<u>aka. k-i</u>	終止形
	+実体修飾第1描写詞	<u>aka. k-i</u>	連体形
	+仮定描写詞	<u>aka. k-ereba</u>	仮定形
形容基 aka. k-Øu=ar-			
	+実現見込み描写詞	<u>aka. k-Øu=ar-oo</u>	未然形
	+完了基	<u>aka. k-Øu=ar-i=t-Ø=a-Ø</u>	連用形

仮定形・未然形は無意味に形式を分割している。未然形と連用形の一つは形容詞そのものではなく形容基(擬似動詞)を使用している。

第9章

描写詞

いくつかの描写詞についてはすでに述べた(4.2)。ここでは「連続描写詞」と「実体修飾第2描写詞」(第2修飾詞)について述べる。

9.1 連続描写詞 -(i) / -u

「連続描写詞」というのは、文字どおり、構造あるいは属性を「連続して描写する際に属性に付加して使用する詞」である。

属性が動属性・態属性・助動属性であれば -(i) であり、形容属性・否定属性であれば -u である(国語文法の連用形である)。

この連続描写により、「文の中止め」あるいは「述語の拡大」が行われる。

1) 他の単位構造を続けて描写する場合……文の中止め

複数の単位構造^{*1}を連続して描写し、一文とする場合

- ① 彼のはプールで oyog-i, 私のは部屋で雑誌を yom-u 。(図9-1)

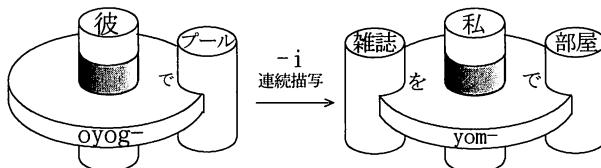


図9-1 異なる構造の連続描写

*1 一つの動属性ないし形容属性と、その属性に立つ主体とから成る単位的構造。

第Ⅱ部 要素分類

② 夏∅₁は atu. k-₁, 冬∅₁は samu. k-_i。

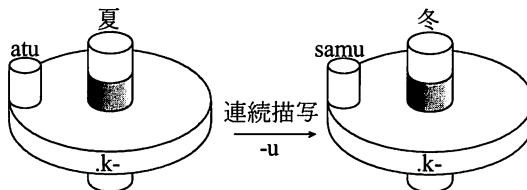


図9-2 異なる構造の連続描写

③ 酒を yame-∅, 薬を nom-_i, 健康が回復するのを mat-u。

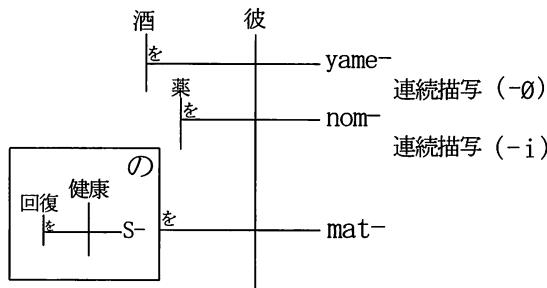


図9-3 同一構造内の単位構造を連続描写

④ haya. k-₁ aruk-u.

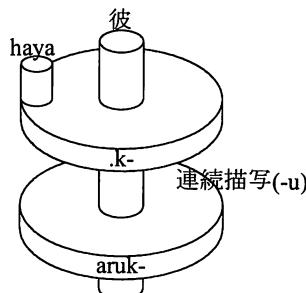


図9-4 同一構造内の単位構造を連続描写

2) 他の属性を続けて描写する場合……述語の拡大

他の属性を連続して描写し、拡大された一つの述語とする場合に -(i) を使用する。併合手「=*¹」でつないで表示する。

魚を tur-i=age-(魚を釣り上げる) 魚を tabe-∅=mas-(魚を食べます)

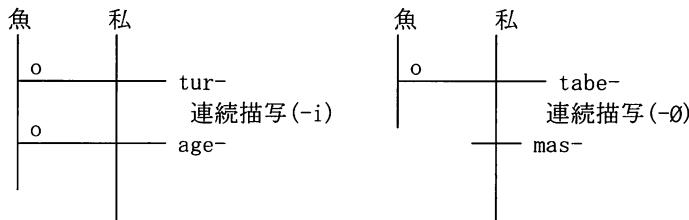


図9-5 複合化

図9-6 助動詞で丁寧化

9.2 実体修飾第2描写詞 -(i) / -u

(第2修飾詞)

実体修飾第1描写詞による実体修飾については

『発展A』のA VI部において詳しく扱っている。

「実体修飾第2描写詞」(第2修飾詞)は、動属性の場合は -(i) という形式、形容属性の場合は -u という形式をしている。ここでは包含実体を修飾する機能と非包含実体を修飾する機能について述べる。

1) 無名包含実体を修飾する場合

包含実体が名のないゼロ包含実体(「0包」と表示)である場合、副構造(包含実体内の構造)の属性の実体修飾第2描写によりその属性詞が実詞として機能できるようになる。副構造が動属性である場合は次のような例がある。

彼はコーヒーを飲みに行く。(図9-7)

彼女は花を見に来る。(図9-8)

*1 併合手 (=) により他の要素(語)との境界が明確になり、構造のあり方が容易に把握できるようになる。次の上下を比べてみると、下の方がずっと分かりやすい。(併合手については 5.1注 参照。)

yom-as-e-∅=mas-en-∅-∅-de=s-i=t-∅=a-∅

yom-as-e-∅=mas-en-∅=∅-de=s-i=t-∅=a-∅

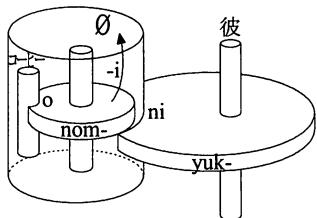


図9-7 コーヒーを飲みに行く

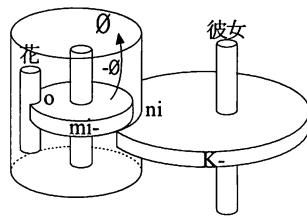


図9-8 花を見に来る

この例では、包含実体内の副構造、つまり下線部が実体化している。

彼 \emptyset は ヨーヒーを nom-i=θ包-ni 行く。

彼女 \emptyset は 花を mi-i=θ包-ni 来る。

遊び(asob-i=θ包)、人任せ(hito-θni=makase-θ=θ包)のような事象名(「～すること」の意)を形成することもある。

また、副構造が形容属性である場合は -u という描写詞によって可能となる。ただし、これが適用できる形容属性は「近.k-、遠.k-、早.k-、遅.k-」等、若干のものに限られている。

彼女 \emptyset は too.k-u=θ包-kara 来る。(図9-9)

彼 \emptyset は 彼女-yori oso.k-u=θ包-made 泳ぐ。(図9-10)

(ヨリ格の定義については A16.5〈60-1〉参照)

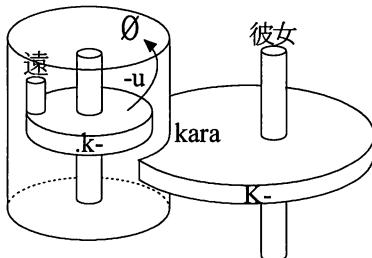


図9-9 彼女は遠くから来る

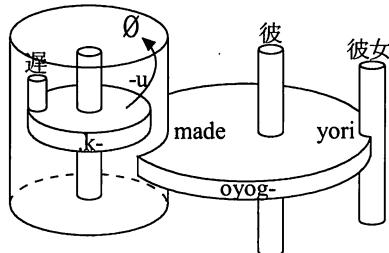


図9-10 彼は彼女より遅くまで泳ぐ

2) 有名包含実体を修飾する場合

包含実体が「方・ぶり・よう・ざま」のような名をもっている場合には、次のように行為名、方法、様子を表す実体を形成する。

- ・行為名… 「方」 撃ち方 (ut-i=kata), やめ ! (図9-11)
- ・方法…… 「よう」 彼は旅行中で, 伝えよう (tutae-θ=yoo) がない。
- ・様子…… 「ぶり (っぷり)・よう・ざま」
彼女は飲みっぷり (nom-i=ppuri)がいい。
彼の驚きよう (odorok-i=yoo)を見せたかった。
彼の生きざま (iki-θ=zama)に惹かれて研究をはじめた。

(同時) すれちがいざま (suretiga(w)-i=zama) に声をかけられた。(図9-12)

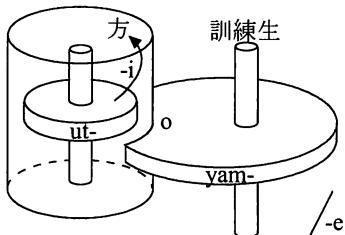


図9-11 撃ち方, やめ !

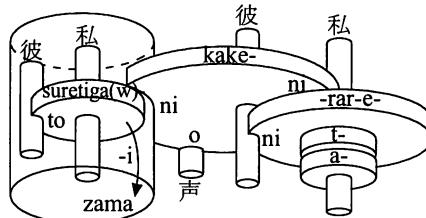


図9-12 すれちがいざまに声をかけられた

3) 実体(非包含実体)を修飾する場合

「さすらいびと sasura(w)-i=bito」では動詞(sasura(w)-)が修飾第2描写詞 -i によって実体(ひと)を修飾している(図9-13)。この第2修飾は第1修飾(『発展A』A16章)の -u による修飾(さすらうひと sasura(w)-u=hit o)と比べて生産性が低く、慣用的な修飾関係に使用が限定されている。

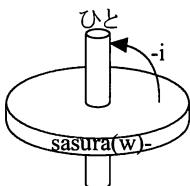


図9-13 さすらいびと

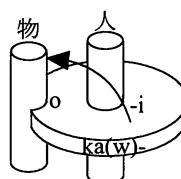


図9-14 買い物

ほかに「招き猫 manek-i=neko」「通り雨 toor-i=ame」のようなものが例として挙げられる。「話し手(hanas-i=te)」の場合は「動作をする人」を意味する「手」が「人」の代わりに使用されている。「買い物 ka(w)-i=mono」

(図9-14)のように客体(物)が修飾されて行為そのものを意味するような場合もある。

4) ゼロ化した実体(非包含実体)を修飾する場合

「酒飲み」というのは酒が好きでたくさん飲む人のことであるが、これは主体である「人」のような実体がゼロ化して「酒(を)nom-」の第2修飾を受けたものと考えられる「sake- \emptyset o=nom-i= \emptyset 」(図9-14)。「付き添い(tuk-i=so-i= \emptyset)」「猿まわし(saru- \emptyset o=maw-as-i= \emptyset)」等も同様である。

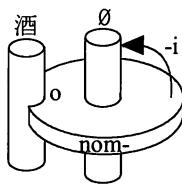


図9-14 酒飲み

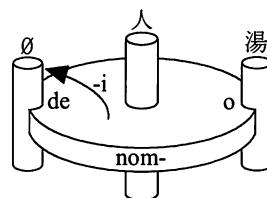


図9-15 湯飲み

また、「湯飲み(yu- \emptyset o=nom-i= \emptyset)」のように、客格(で格)にある客体(茶碗)がゼロ化していて、これが修飾を受けるタイプのものもある(図9-15)。

「靴下どめ(kutusita- \emptyset o=tome- \emptyset = \emptyset)」、古くは「鏡(kaga- \emptyset o=mi- \emptyset = \emptyset)」(kagaは kage 「影」の古形…『岩波古語辞典』)もこのタイプである。

「箸置き(hasi- \emptyset o=ok-i= \emptyset)」ではゼロ化した実体は「に格」にある。

5) 降りはしない

「降りはしない」の中には「降り」という実詞(名詞)が入っている。これは hur-i= \emptyset 包で、無名包含実体が修飾されたものであると考えられる。この「降りはしない」という否定形式については 35.3 で扱っている。「見もしない」も同様のものとして考えられる。

◎「実体修飾第2描写詞」については、杏林大学外国語学部・木村泰介君の2000年度卒業論文「描写詞-(i)による実体修飾」の指導時に行った木村君との議論において確認された部分が多い。木村君の論は『発展C』に紹介予定。

第10章

助動詞

10.1 助動詞

元来動詞でありながら、歴史的変化の結果、もはや動詞としては働くかず、特定の意味において動詞を補助する役目を担うようになったものを助動詞といふ。

構造伝達文法では、3つの詞を助動詞としている。 $=\text{(ma)s-}$ と、 $=\text{t(e)-}$ と、 $=\text{a(r)-}$ である。（ $=$ は「併合手」、5.1 注 参照。）

構造上では、助動属性は必ず動属性に付属し、決して単独では現れない。それで、動属性より小さめにモデル化する（図10-1）。

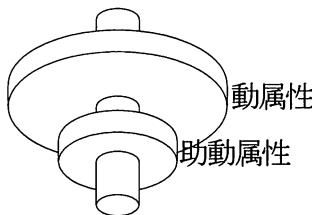


図10-1

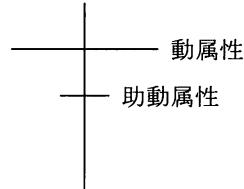


図10-2

助動詞が句構成に組み込まれるとときの表層形式は次のようになる。

動詞 <u>$-\text{(i)}$</u> = 助動詞 - 任意の描写詞 $\quad \quad \quad //$ 連続描写詞	例： ur-i=mas-u $\text{mi-\emptyset=mas-yoo}$
--	---

（助動詞が連続する場合もこれに準ずる。）

それでは、 $=\text{(ma)s-}$ 、 $=\text{t(e)-}$ 、 $=\text{a(r)-}$ を順に検討してみたい。

10.2 丁寧の助動詞 $=\text{(ma)s-}$ ($=\text{mas-}$, $=\text{s-}$)

「ます」は、平安時代の「(物を)さしあげる、奉仕する」という意味の動詞「まゐらす」 mawiras- が、次のように変化してできた語であると言われている*1。

まゐらす	mawiras-u	(平安)
まゐらする	mawiras-uru	
ま らする	ma ras-uru	(室町)
ま っする	ma s s-uru	(室町末期)
ま っす	ma s s-u	
ま す	ma s-u	(江戸中期)

このような起源をもつこの助動詞 $=\text{(ma)s-}$ は、動詞句に丁寧さを加える機能をもつため、「丁寧の助動詞」と呼ばれる。

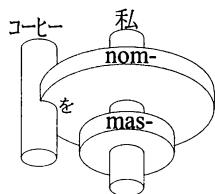


図10-3 コーヒーを飲みます

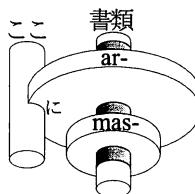


図10-4 書類はここにあります

$=\text{(ma)s-}$ は、 $-de=ar-$ が先行する場合、動詞(ar-)を描写しないうえに、 $=\text{mas-}$ 自身の ma の部分をも省略してしまうことがある。このとき「です」が生じる。($=\text{mas-}$ を公式的に $=\text{(ma)s-}$ と表記する理由はここにある。)

$$\begin{array}{ccc} -de=ar-i=\text{mas-} & & \text{(であります)} \\ \downarrow & & \downarrow \\ -de= \emptyset-\emptyset= & s- & \text{(で_____す)} \end{array}$$

(第11章「断定基」参照)

*1 『岩波古語辞典』『日本文法大辞典』に基づく。「まゐらす」は、構造を考える上では maw-i=ir-as-u としなければならないが、現代語「ます」の構造を考えるためにには「まゐらす」を一つの動詞とみなしてよく、そのような分析にまで立ち入る必要はない。

$=(\text{ma})\text{s}-$ の否定は、 $=\text{mas}-$ だけに用いられる否定詞 $-\text{en}-$ による。その際、後ろの基本描写詞 $-\text{u}$ はゼロ化する。

yom-i=mas-en-Øu

10.3 開始後の助動詞 $=\text{t}(\text{e})-$ ($=\text{te}-$, $=\text{t}-$)

助動詞 $=\text{t}(\text{e})-$ は、完了の助動詞「つ」の連用形「て」に由来するといわれている。(完了の助動詞「つ」は、「物を意志的に眼前にほうり出してしまう」という意味をもつ古語動詞「棄(う)つ」のはじめの母音「う」が脱落して生じたものである^{*1}。) (『発展A』A4.5 参照)

構造はこのように示すことができる。

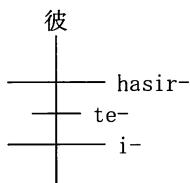


図10-5 走っている
hasir-i=te-Ø=i-

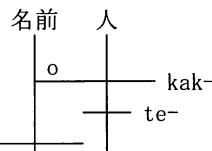


図10-6 名前が書いてある
kak-i=te-Ø=ar-

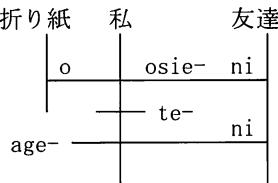


図10-7 教えてあげる
osie-Ø=te-Ø=age-

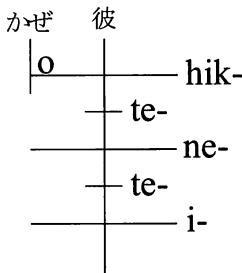


図10-8 かぜをひいて寝ている。
hik-i=te-Ø, ne-Ø=te-Ø=i-ru

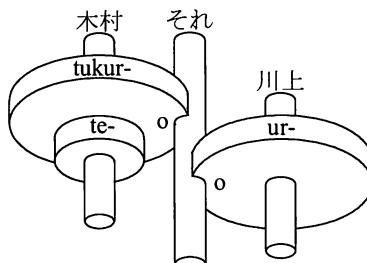


図10-9 木村さんが作って、川上さんが売る
tukur-i=te-Ø,

*1 『岩波古語辞典』p. 1473 及び p. 1504 参照。

助動詞 $=t(e)-$ は、先行の属性と主体との「結び付きが成立したあと」、つまり、「動作等の開始後」をイメージさせる助動詞である。それで、「開始後の助動詞」と名づける。開始後の領域を表す(13.1 参照)。

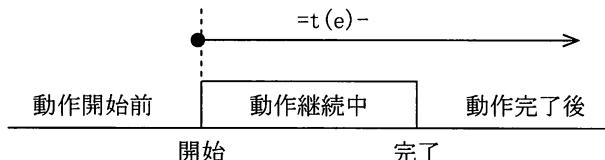


図10-10

助動詞 $=t(e)-$ は、もう一つの助動詞 $=a(r)-$ を後続させるとき、e を脱落させて $=t-\emptyset=a(r)-$ (10.5 参照) となる。 $=te-$ を公式的に $=t(e)-$ と表記する理由はここにある。

助動詞 $=t(e)-$ は、連続描写の際に、先行の動属性(動詞)の種類に応じて「音便」の現象を生じる。

動詞には、動詞末音が母音の場合と子音の場合がある。

母音の動詞末…… $mi-$ (見る), $tabe-$ (食べる) のように、i か e のいずれかである。

子音の動詞末…… $tob-$ (飛ぶ), $nom-$ (飲む), $sin-$ (死ぬ),
 $nug-$ (脱ぐ), $sak-$ (咲く), $tor-$ (取る),
 $kat-$ (勝つ), $ka(w)-$ (買う), $kas-$ (貸す)
 のように、b, m, n, g, k, r, t, w, s の 9 つのうちのいずれかである。

このうち、音便形が生じるのは、s を除く子音末動詞の場合である。

音便の現象を表10-1にまとめておく。

◎音便の現象がなぜこのような形式をとるのか、またなぜ s 末動詞が音便化しないようにみえるのかについては『発展A』A3章で詳しく説明している。

表10-1 (音便表)

動詞	例	-i=t(e)-	音便形	例
b 末動詞	飛ぶ	ɸb-i=t(e)-	ɸn- =d(e)-	ton- =d(e)-
m 末動詞	飲む	ɸm-i=t(e)-		non- =d(e)-
n 末動詞	死ぬ	ɸn-i=t(e)-		sin- =d(e)-
g 末動詞	脱ぐ	ɸg-i=t(e)-	ɸ -i=d(e)-	nu -i=d(e)-
k 末動詞	咲く	ɸk-i=t(e)-	ɸ -i=t(e)-	sa -i=t(e)-
r 末動詞	取る	ɸr-i=t(e)-	ɸt- =t(e)-	tot- =t(e)-
t 末動詞	勝つ	ɸt-i=t(e)-		kat- =t(e)-
w 末動詞	買う	ɸw-i=t(e)-		kat- =t(e)-

10.4 完了基形成の助動詞 =a(r)- (=ar-, =a-)

助動詞 =a(r)- は、助動詞 =t(e)- に後続する形で =t-θ=a(r)- という完了基(10.5 参照)を形成する。=a(r)- はこの基においてのみ機能する。それで、「完了基形成の助動詞」と名づける。(「完了基」はより正確には「局面変化完了認知基」……A 4 章参照)

助動詞 =a(r)- は、存在を表す動詞「あり」に由来する。(=t-θ=a(r)- は、古語の完了の助動詞「つ」の連用形「て」にラ変動詞「あり」がついてできた「たり」に由来する。『日本文法大辞典』参照。)

助動詞 =a(r)- は、後続の描写詞に応じて r 音を出没させる。=ar- を公式的に =a(r)- と表記する理由はここにある。

$$=t-\theta=\underline{a}-\theta u \quad =t-\theta=\underline{ar}-a(ba) \quad =t-\theta=\underline{ar}-oo \quad =t-\theta=\underline{ar}-i$$

助動詞 =a(r)- は、断定基 -d=a(r)- (11.1②参照) の =a(r)- と区別されなければならない。前者は助動属性であり(図10-11)，後者は本属性である(図10-12)からである。これは構造図で明瞭に区別できる。

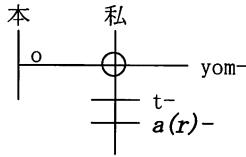


図10-11 私は本を読んだ

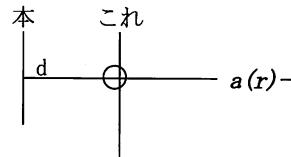


図10-12 これは本だ(11-1②)

10.5 完了基 $=t-\emptyset=a(r)-$ ($=t-\emptyset=ar-$, $=t-\emptyset=a-$) (A 4章参照)

「基」とは、詞がいくつか集まって一つのまとまりをなし、全体として一定の構造形式と意味を保つものである。助動属性には「完了基」がある*。

「完了基」は、助動詞 $=t(e)-$ と $=a(r)-$ で構成されて、 $=t-\emptyset=a(r)-$ という形式をとる(図10-13~15)。(正確には「局面変化完了認知基」A 4章)

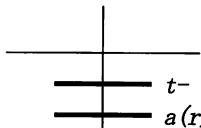


図10-13 ~た

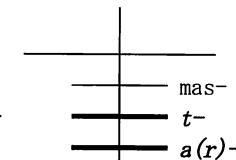


図10-14 ~ました

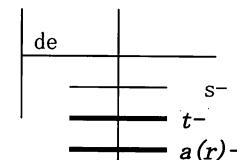


図10-15 ~でした

「完了基」は、助動詞 $=(ma)s-$ に後続し、逆にはならない。

$=mas-i=t-\emptyset=a-$ (~ました) (図10-14)

$-de=\emptyset-\emptyset=s-i=t-\emptyset=a-$ (~でした) (図10-15)

「完了基」は、「動作等の完了(後)」を表す。(ただし、図A4-5, -6を参照)

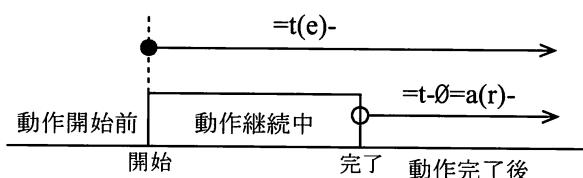


図10-16

*1 $=te-$ のみの関わる基であれば、多数のものがある。一例を挙げる。

$=te-\emptyset=i-$ (~ている) $=te-\emptyset=age-$ (~てあげる) $=te-\emptyset=mi-$ (~てみる)

「完了基」は、「展開描写詞 -a(ba)」と結合して、動作等完了後の局面の展開描写を準備する。

=t-Ø=ar-a(ba) (～たら(ば))
ここを押したら爆発する。

-d=ar-i=t-Ø=ar-a(ba) (～だったら(ば)) (11.1②参照)
男の子だったら、「大輔」にする。

=mas-i=t-Ø=ar-a(ba) (～ましたら(ば))
終わりましたら、こちらへおいでください。

-de=Ø-Ø=s-i=t-Ø=ar-a(ba) (～でしたら(ば)) (11.1④参照)
赤い玉でしたら当たりです。

10.6 形容属性と完了基

完了基が形容属性に付加される場合は、形容属性に直接に付加されるわけではなく、形容基(8.5)に付加される。

siro. k-Ø=ar-i=t-Ø=a(r)- (白かった)
形容基 完了基

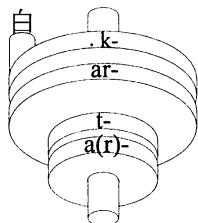


図10-17 白かった

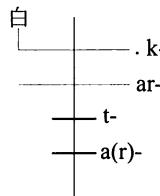


図10-18

10.7 完了基の基本描写と実体修飾描写

動詞 ar- に適用される基本描写詞と実体修飾描写詞は、ともに -u という形式をもつ(ar-u)が、完了基 =t-Ø=a(r)- に適用された場合は両者とも ar-u という形にならずに、r-u の部分が省略されて a だけになる。現代語ではそのように固定されている。それで、次のような表現となる。

完了基を基本描写するにはゼロ化した基本描写詞 $-θu$ を使用する。

買い物に $de-θ=t-θ=a-θu$ (出た)。

その料理はとても $oisi. k-θ=ar-i=t-θ=a-θu$ (おいしかった)。

完了基を実体に修飾させるにはゼロ化した実体修飾描写詞 $-θu$ (矢印で図示)を使用する。

図書館で $yom-i=t-θ=a-θu$ (読んだ)本 (図10-19)

若いころも $utukusi. k-θ=ar-i=t-θ=a-θu$ (美しかった)人 (図10-20)

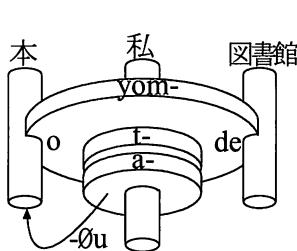


図10-19 読んだ本

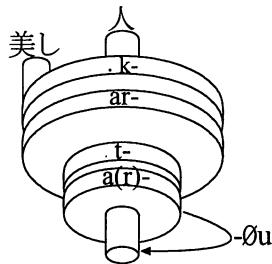


図10-20 美しかった人

「書いて」(テ形)の「て」って何? → p. 71

「書いた」の「た」って何? → p. 74

「である・です・だ」はどういう関係? → p. 77

「だ」のタ形が「だた」でなく「だった」なのはなぜ? → p. 78

「です」が「だ」よりも丁寧なのはなぜ? → p. 79

「ます→ません」「です」の否定は「でせん」じゃない? → p. 80

「で」の格は「に」の格から生まれた? → p. 90

「Aさんって」の「って」って何? → 94

目的語を表さない「を」もある? → p. 98

第11章

断定基

11.1 断定基

断定を表すための基としては、次のものを挙げることができる。

- | | | | |
|---|----------|----------------------|-----------|
| ① | 「である」 | -de=ar- | (論文調) |
| ② | 「だ」 | -d =a(r)- | (普通・ぞんざい) |
| ③ | 「であります」 | -de=ar-i=mas- | (演説調) |
| ④ | 「です」 | -de= Ø-Ø= s- | (丁寧) |
| ⑤ | 「でございます」 | -de=go-za-Ø-Ø-i=mas- | (かなり丁寧) |

この5つの断定基の相互の関係はどうなっているのだろうか。それぞれの構造形式を明らかにしながら、考えていきたい。

① 「である」 -de=ar-

図11-1は「父Ø1は公務員である」の構造を示している。図11-2はその簡略表示である。

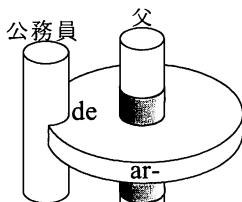


図11-1

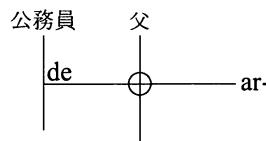


図11-2

(「である」の構造については、1.2 及び 2.9 でも述べた。)

② 「だ」 $-d=a(r)-$

「だ($-d=a(r)-$)」の構造は「である」の構造(①)そのものである。しかし、ことばで描写するときに、次のような音の省略を行うために「だ」の形式が生じる(2.9参照)。

$$\begin{array}{c} -de=ar- \\ \downarrow \\ -d =a - \end{array}$$

歴史的には デアル → デア → ダ と縮まったといわれている^{*1}。構造はそのままでも、ことばで描写する際に省力化が行われてきたわけである。

「だ」は $-d=a(r)-$ と表記するように、出没性の子音 r をもっている。この r の存在が、なぜ「だ」のタ形が「だた」ではなく「だった」のように促音を伴うのかを説明してくれる。

$$\begin{array}{c} -d=ar-i=t-\emptyset=a-\emptyset \\ \downarrow \\ -d=a \underline{t}=t-\emptyset=a-\emptyset \end{array} \quad (10.3 \text{ 表10-1参照}) \quad (A3.5②参照)$$

この r は、「だ」に $-oo$ (実現見込み描写詞)を後続させる際に顕在化する。

彼女øは公務員 $\underline{-d=ar-oo}$

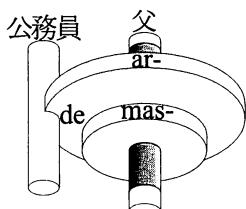
③ 「あります」 $-de=ar-i=mas-$ 

図11-3

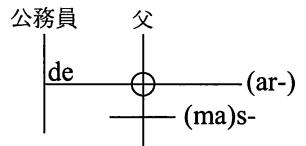


図11-4

図11-3, -4は「父øは公務員であります」の構造である。「父øは公務員で

*1 『日本文法大辞典』「だ」の項に「指定の助動詞『である』→『であ』→『だ』と変化してできたもの。」とある。表層での音形式がこのように変化しても、同じ機能が保たれているのは、構造そのものが変化していないからである。……構造をそのままに保ちながら、描写法(変換法)が時とともに変化していく。

ある」という構造(図11-1, -2)に、丁寧の助動属性 =mas- が付け加えられた形になっている。

④ 「です」 -de=θ-θ=s- (略示形 -de=s-)

「です」は「だ」よりも丁寧である。これを疑う人はいない。しかし、それがなぜかということについて考えようとする人は多くはない。

「です(-de=s-)」は -de=ar-i=mas-「であります」に由来する。図11-4の()内に表示されている要素を省略すれば「です」になる。

$$\begin{array}{ccc} -de=\underline{ar-i}=mas- & \text{(であります)} \\ \downarrow & \downarrow \\ -de=\underline{\theta-\theta}=s- & \text{(で_____す)} \end{array} \quad \text{表11-1参照}$$

日本語にはこのようなタイプの省略がある。特に体育会系の若い人の間で「オス」という挨拶が交わされることがあるが、これは「おはようございます」が縮まってできたもので、初めと終わりの部分だけになってしまったものである。

「です」は「であります」の中間部分が省略されて生じた形式なので、ちょうどこの「オス」に似ている。

「です」はこのように「であります」の構造から生じるのであるから、丁寧の助動属性 =mas- を保っている。一方、「だ」は構造(図11-1, -2)に =mas- を持っていない。「です」が「だ」より丁寧であるのはここに理由がある。

さて、しかし、この「オス」的な中間部の省略は、否定文では行われない。

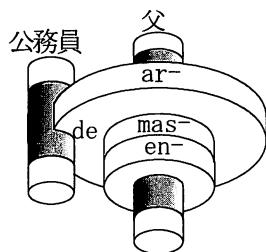


図11-5

父θ1は公務員ではありません

図11-5は図11-3の構造に -en- という否定属性を付加して否定構造にした

ものである(否定構造に関しては、第31章を参照)。

この構造では全部をことばにして「ではありません」と描写しなければならず、「で~~(は)~~りません」などという省略形を作ることはできない。(「食べます」の否定は「食べません」、つまり「ます」の否定は「ません」ではあっても、「です」の否定は「でせん」にはならない。)

興味深いことだが、否定にすると省略ができる、本来の形で表現しなければならない。否定の形にすることで本来的な構造が明確になる*1。

⑤ 「でございます」 -de=go-za-θ=θ-i=mas- (略示形 -de=go-za-i=mas-)

「でございます」の構造は図11-6、-7に示すような形になっている。

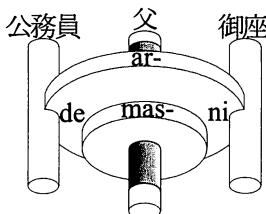


図11-6

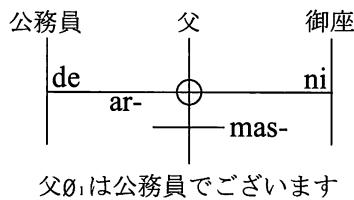


図11-7

*1 否定の形にすることで本来的な構造が明らかになることは、様相は異なるものの、韓国語にも見られる。

1) na-nǔn 田中 i -mni-da. (私は田中です。)

(私-は 田中 ari-mas-u. ……厳密な対応ではないが、参考までに。)

日本語で「私は田中です」と言うときは、「田中」は「で格」にある。これは音形式に表れていて、明白である。しかし、韓国語では「田中」が何格にあるのかはわからない。少なくとも音形式には表れていない。

文中の名詞はすべて何らかの格にある、という構造伝達文法の立場からすれば、韓国語文中の「田中」が無格であることは考えられない。

そこで 1) の文を否定文にしてみる。

2) na-nǔn 田中 ga an - i -mni-da. (私は田中ではありません。)

(私-は 田中 が nai-ari-mas-u.)

するとこのように、(主格を表す)助詞 ga が現れる。普通は ga an- 全体で否定の形であると説明されて、特に ga を取り出してこれが何であるかを言うことはない。しかし、これにより「田中」は主格にあることが推定される。(もしこの ga が主格助詞であるとすると、「私」と「田中」のいずれもが属性 i- に対して主格にあることになり、韓国語ではここにも二重主格が存在することになる。)

この構造は基本的には「であります」の構造(図11-3)と同じであるが、「御座(ござ)」という実体が ar- という属性に「に格」で関わることになっている。(「御座」はモノ名詞、動作的名詞の両方で考えられる。)

この構造を保ちながら、歴史的に描写法が省力化されてきて、途中で「でございます」が生じた。その近世での変化の過程を表11-1に示す(『日本文法大辞典』「です」の項参照)。

表11-1

(go-za-ni=ar-i=mas-u)			
-de=go-za	=ar-i=mas-u	でござ	あります
-de=go-z a	r-i=mas-u	でござ	ります
◎-de=go-z a	-i=mas-u	でござ	います
-de=go-z a	r-i=n s-u	でござ	りんす
-de=go-z a	=n s-u	でござ	んす
-de=g a	=n s-u	でが	んす
-de=a a	=n s-u	であ	んす
-de=e e	= s-u	でえ	す
-de=e	= s-u	で	す

(=s-u の -u は無声化しているから -θ とすべきかもしれない。)

このほかにも「でやんす」「でごいす」「ざあます」「ざんす」「だす」などの形が生じている。

余談になるが、このまま省略が進むと、「で」さえなくなってしまうかもしれない。すでに、「おやじは公務員す。」「これ、おいしいすね。」などという言い方も現れている。あと100年も経てば、「公務員です」などというのは古めかしい表現ということになるのかもしれない。(「です」が今日のように広く用いられるようになったのは明治20年代といわれているから、それ以前の日本語話者は、未来の日本語話者である現在の私たちが「です」などというとんでもなく下品な縮約形を使っていようなどとは夢想だにしなかつたのではないだろうか。)

そして、ついには「す」もいらなくなって、ロシア語のように、「ヤー・チャイカ」「わたしあかもめ」でよいことになるのかもしれない。

◎ 5つの断定基の相互関係

それでは、この章で得られた結果をまとめて次のように示しておく。5つの断定基の相互関係はこうなっていたのである。

「である」 = 「だ」 (同構造・異描写)

↓ ←+ます

「あります」 = 「です」 (同構造・異描写)

↓ ←+御座(に)

「でございます」

さて、この5形式すべてに共通していることがある。それは、すでに明らかであるが、構造において、みな -de=ar- (である)の部分を持っているのである。そして、このゆえにこそ、この5形式はすべて同じ機能を持つのであり、相互に言い換えが可能となっているのである。

11.2 断定基の実体修飾描写(1)……AであるB

断定基の実体修飾描写は限られている。

公務員である父が……

とは言えるが、

*公務員だ父が……

*公務員です父が……

とは言えない。

公務員であります父が……

公務員でございます父が……

は、不可能というわけではない。

これについて考えるには ar- と =mas- の実体修飾描写の可能性について検討してみればよい。

まず、「である -de=ar-」であるが、この構造は図11-1, -2のようであった。この ar- に実体修飾描写(4.2 2))の -u の矢印を適用すれば、図11-8, -9の

ようになる。ここに問題はなく、

公務員-de=ar-u 父 \emptyset は……
が得られる。

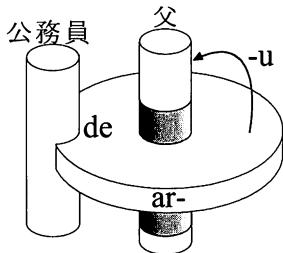


図11-8

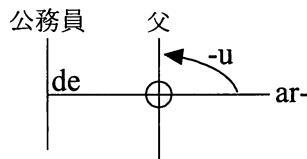


図11-9

ところが、「だ -d=a(r)-」の場合は構造形式は同じであるものの、この「だ」という形式での描写の際には「基本描写」の -u が a(r)- にゼロ化して結びついてしまっている(-d=a-θu)ために、a(r)-は「実体修飾描写」の -u を受け入れる態勢を失っている。このために「実体修飾描写」の -u をつけて

*公務員-d=a-θu-u 父

としても修飾描写は不可能となるのである。(「基本描写」というのは、ある構造の描写が完結したものであることを示す描写である。4.2 1)参照。)

ただし、実体が包含実体の「θ包」「こと」「もの」であれば修飾描写の可能性が残っている(-u はゼロ化する)。

父 \emptyset は公務員-d=a-θu θ包-kara 定年がある。

まあ、立派な公務員-d=a-θu こと。

だって父が公務員-d=a-θu もの。

とはいって、この「こと」「もの」は主体・客体にはならない。

「です -de=s-」の構造は図11-3,-4に示されているように、「であります」と同じものなのであるが、これも「だ」の場合に似て、「です」という形式での描写の際には「基本描写」の -u が =s- に結びついている(-de=s-u)た

めに、「実体修飾描写」の $-u$ を受け入れる態勢を失っている。それで、

*公務員-de=s-u 父

が不可能となる。

「であります」「でございます」の描写では、助動詞 =mas- がそのまま生きており、実体修飾描写の $-u$ を受け入れる態勢がある。それで

公務員-de=ar-i=mas-u 父

公務員-de=goza-i=mas-u 父

が可能である。しかし、実際にこの形式が使用されることはまれである。名詞修飾の際にまで丁寧の助動詞 =mas- を使用する必要はないからである。

このようなわけで、断定基の実体修飾描写は「である」の形式にはほぼ限定されている。

11.3 断定基の実体修飾描写(2)……AなB……「な基」

断定基には歴史的に別のタイプが存在する。

-ni=ar- 「にあり」

が変化して奈良時代に発生した

-n =ar- 「なり」

である(ここでは「たり」は扱わない)。「…である」と断定する意味を表す。

汝たちもろもろは、吾が近き姪なり (続紀宣命一七)

以上『岩波古語辞典』p. 1482参照。

この「なり」は、『日本文法大辞典』(p. 611)によれば、

奈良・平安時代に最も栄え、鎌倉時代にはいると形が崩れはじめ、断言的なものは「である」の方向へ、形状的なものは「な」という方向へ変じて存在した。

という。

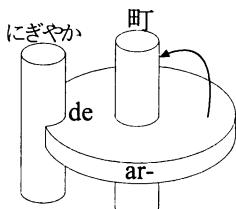
現代日本語では、-n =a- $\emptyset u$ の形式で

nigiyaka-n =a- $\emptyset u$ 町 (にぎやかな町 図11-11)

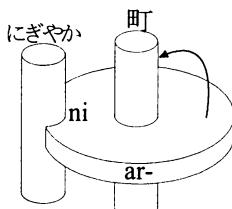
のように、形状的な意味をもつ実体(にぎやか)を「に格」に置き、これを実体修飾描写するのに使用するようになっている。(「-θu」は、実体修飾描写詞がゼロ化したものであることを示している。)(「である」の構造では「である」の形式を保って名詞を修飾する(11.2)……図11-10。)

また、次のようにノ形式実体(36.6)を修飾する場合もある。

sizuka-n =a-θu の を聞く (静かなのを聞く 図11-12)



にぎやかである町



にぎやかな町

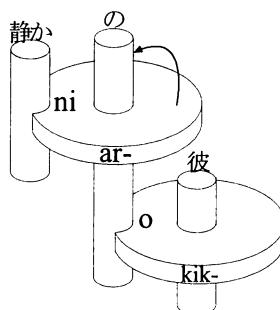


図11-12 静かなのを聞く

図11-11,-12 の2例は非包含実体を修飾する場合であるが、これとは別に包含実体を修飾する場合がある。この場合には

健康-n =a-θu のでうれしい (図11-13)

(皆が健康なのでうれしい)

のように形状的な意味をもつ実体(健康)ばかりでなく、それ以外の実体(学生)でも -n =a-θu の形式が可能となっている。

学生-n =a-θu ので送金する (図11-14)

(弟が学生なので、父は毎月送金する)

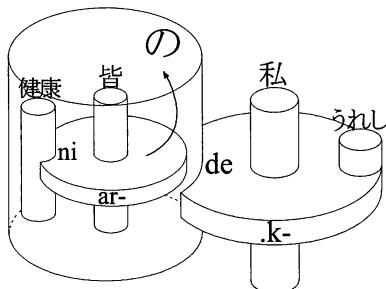


図11-13 皆が健康なのでうれしい

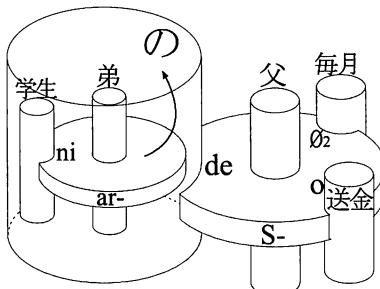


図11-14 弟が学生なので送金する

この $-n = a - \theta u$ はこのように、断定基のいわば实体(名詞)修飾専用の形式になっている。それで、これを「な基」として扱うことにする。「な基」の基本的構造は図11-15, -16のようなものである。

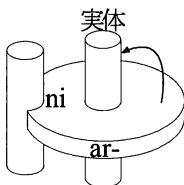


図11-15 「な基」

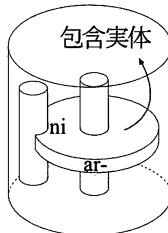
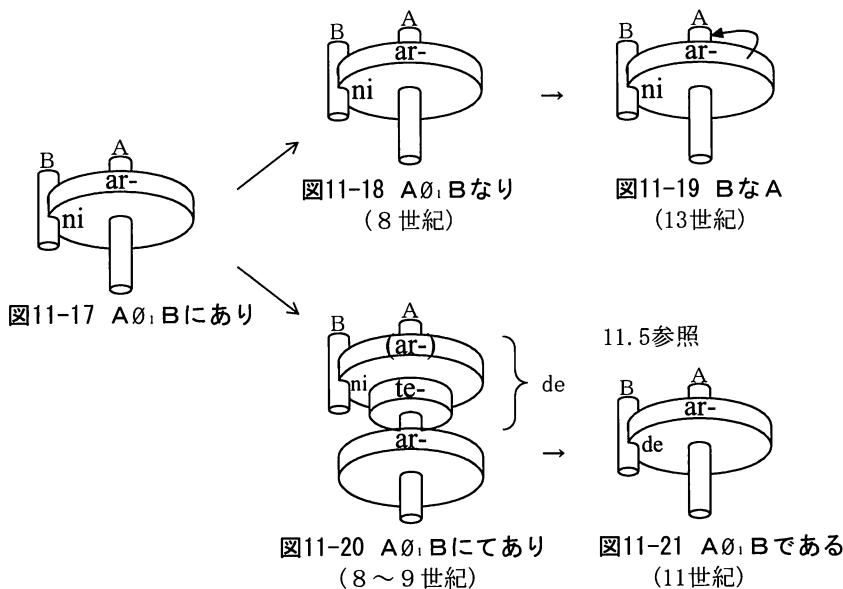


図11-16 包含実体の「な基」

(「自由な女神」と「自由の女神」の違いについては 37.6 参照。)

なお、「な」と「である」の関係を歴史的に見れば、次のような構造的・描写的変化においてとらえることができる。

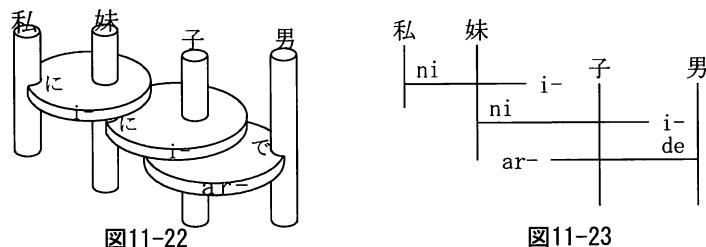
$$\begin{array}{l} -ni=ar- \\ \quad \quad \quad \left\{ \begin{array}{l} -n = ar- \rightarrow -n = a-\theta u \\ -ni=\theta-\theta=te-\theta=ar- \rightarrow -de=ar- \\ \hline \end{array} \right. \\ \quad \quad \quad \rightarrow de \text{ (11.5参照)} \end{array}$$



11.4 形式断定基 (妹は男です)

では次に、形式だけの断定基について考えてみたい。形式だけの断定基の代表として「です」を選ぶことにする。その他の4形式(だ・である・あります・でございます)はこれに準じたものとなる。

いま、このような構造がここにある。



この構造から、たとえば次のようないろいろな表層文が描写される。

私には男の子がいる妹がいる。

私には男の子のいる妹がいる。

私の妹には男の子がいる。

私の妹の子は男である。

私の妹の子は男だ。

男の子が私の妹にいる。

これらではすべての要素が描写され、しかも属性が最後に描写されているので、述語でしめくられた通常の文の形になっている。

ところが、状況などから、必要な要素だけを描写すれば十分という場合もある。たとえば「うちの子は女。」と言った後で、上の構造を描写するには妹は男。

で十分である。状況の助けを借りれば、部分描写で構造全体が伝達できる。

しかし、これでは通常の文の形になつてないので、通常の文に似せるために断定基「です」を後続させて、

妹は男です。

と表層化することもある。一応、通常の文の形になつてはいるが、この「です」は形式的なものである。もし形式的なものでないとするなら、文の意味が「男である妹」となり、おかしなことになつてしまう。

文の形を整えるためだけの形式的な断定基が使用される。その構造は図11-24のようなものとなる。ある構造をゼロの包含実体(6.6参照)に入れて、その包含実体を断定基の「で格」に置いたものとなる*1。

この断定基と包含実体は、あくまでも形式的なものなので、次の3つの特徴がある。

- ① 断定基の主体（太い点線で表示）は仮の主体で、特に何と特定できない。
- ② 包含実体 \emptyset （点線枠長方形で表示）も、非常に形式的なものなので、中の副構造は通常の包含実体内の副構造のように固定したものではない。ここで

*1 事情説明などに使用される「のです」は、形式は似たものになるが、これとは別のものである(37.1参照)。

は副構造は主構造と同じ自由度をもっている。具体的に言えば、図11-24において、「(妹の)子」は属性 ar- に対して3種類の主格 (\emptyset_1 , ga_1 , ga_2) のいずれをもとり得る。

③ 通常の副構造描写とは異なるので、動属性を実体修飾描写 $(-(r)u$ 描写) してゼロの包含実体を修飾させることはできない。俗語的表現となってしまう。

*私の妹の子は男で $ar-u \emptyset_1$ です。 (男であるです／あるっす。)

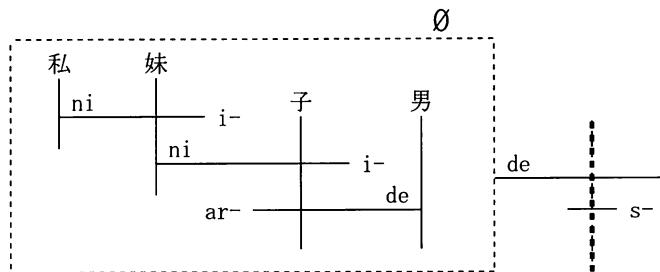


図11-24

ほかの例も挙げておく。

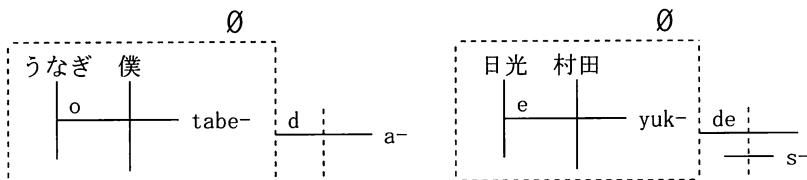


図11-25 僕はうなぎだ。

*うなぎを食べるだ。

図11-26 村田さんは日光です。

*日光へ行くです／っす。

形式断定基は以上のような特徴をもつが、完全に $-de=\emptyset-\emptyset=s-u \Rightarrow -d=a-\emptyset$ で固定してしまっているわけではなく、

村田さんは日光 $\emptyset-de=\emptyset-\emptyset=s-u=t-\emptyset=a-\emptyset$ (でした)

村田さんは日光 $\emptyset-d=ar-i=t-\emptyset=a-\emptyset$ (だった)

村田さんは日光 $\emptyset-de=\emptyset-\emptyset=s-yoo$ (でしょう)

村田さんは日光 $\emptyset-d=ar-oo$ (だろう)

のように、完了形式や推量形式になりうるし、また、

村田さんは日光 $\emptyset\text{-de-wa=ar-i=mas-en-\emptyset}$ (ではありません)

のように否定形式にもなりうる(否定については第30, 31章参照)。

そして、次のように、形式断定基そのものが「のだ基」(37.1)の中の包含実体「の」に入って、全体で「～なのだ」となることもある。

村田さんは日光 $\emptyset\text{-n=a-\emptyset}$ の $\emptyset=\emptyset-\emptyset$ $\emptyset\text{-d=a-\emptyset}$ (なのだ)

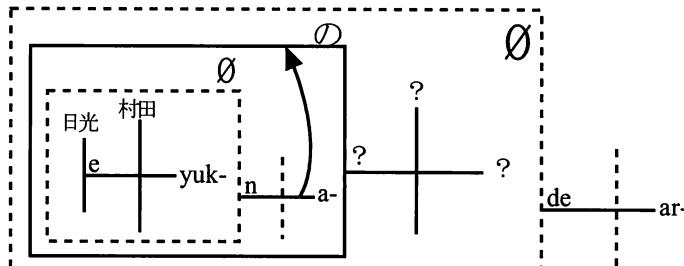


図11-27 村田さんは日光なのだ

以上、この形式断定基のおかげで、できるだけ無駄を省いて、しかも文としての体裁を保つつつ伝達を行うことができる^{*1}。

11.5 「で格」の誕生

① 「で」の意味

「で」にはいろいろな同名格がある。『三省堂 現代国語辞典』によれば、

- (1) 場所を示す。「砂場であそぶ」
- (2) 手段・方法を示す。「鉛筆で書く」

*1 図11-25, -26のような構造から描写される表層文を「うなぎ文」と名づけて、「だ・です」が述語の代用をする、と説く立場がある。表層の形式を扱うかぎりでは、あたかもそのように見えることから、そう言ってもさしつかえないことが多い。

僕はうなぎだ。 ← 僕はうなぎを食べる。

しかし、このとらえ方には無理がある。「だ・です」がなぜ「食べる・行く」などに代わる意味をもつようになるのかは理解できない。構造が大きく異なっているのである。「だ・です」は、英語の do とはおよそ性質の異なるものである。

- (3) 材料・原料を示す。「紙で作る」
- (4) 原因・理由を示す。「病氣で休んでいる」
- (5) 時間・期間・年齢・金額・数量などを示す。「あと一時間で終わる。
六十歳で退職した・千円で買う」
- (6) もとづくところを示す。「規則で許されている」
- (7) 主体を間接的に示す。「警察で原因を調べている」
- (8) 状態を示す。「すごい速さで飛ぶ」

とあり、また、助動詞「だ」の連用形の用法として

「あちらは弟で、こちらが兄だ」

という例が挙げられている。

なぜ「で」にはこのような意味(同名格)があるのだろうか。「で」格の誕生に至る経緯を知ることによって、その理由を理解することができるだろう。

② 「で」は「にて」から生まれた

『岩波古語辞典』p.1491によれば、格助詞「で」は「にて」が転じてできたもの(nite → nte → nde → "de")で、平安中期ごろから用いられ、鎌倉時代以後多用されるようになった。場所・手段・原因・状態などを表す、という。

では、この「にて」とは何なのだろうか。同ページには、

格助詞「に」と接続助詞「て」との複合である。奈良時代の後半から平安時代にかけて生じた。

とある。しかし、格助詞「に」に接続助詞「て」が直接つくことは構造上ありえないから、これは構造を描写するうえでの出来事であることになる。

確かに、『日本文法大辞典』「にて」の項によれば、上代には「場所・時」を示す「にて」には「にして」の形をとるほうがはるかに多いという。そして、ここに使用されている「し」はサ変動詞「す」の連用形で、「にありて」「において」等における「ある」「おく」の働きを代行するものである、という。

つまり、「にて」より前に「にして」という形式があり、意味は「にありて」「において」であった。構造は図11-28のように考えることができる。この構造が「にて」という形で描写されたのである。「にて」はいわば「基」なのであった。

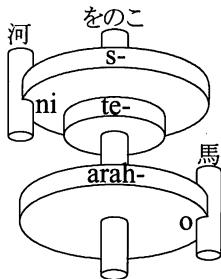


図11-28 河にて馬あらふをのこ

河にして
(河にありて)
↓
河にて

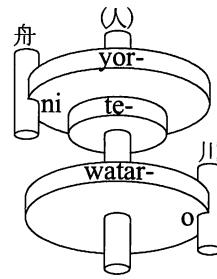


図11-29 川を舟にて渡る

そこで、「手段・原因」に対しては「に(より)て」を類推で補って(つまり、構造上では s- を yor- に換えて(図11-29)、次のようにして「にて」が生じたものと考えることができる。

[場所・時・状態]	にして (にありて, において)	} → 「にて」
[手段・原因]	に(より)て	

『日本文法大辞典』「にて」の項等から用例を簡略化して引用しておく。

[場所・時] 河にて馬あらふをのこ (にありて)

十二にて御元服したまふ (にありて)

[資格・状態] 母は筑前守の妻(人)にて下りにければ (にありて)

家の人は、皆、男子にて生まれよかし (にありて)

[手段・方法] 深き川を舟にて渡る (によりて)

火にて物いりなどして (によりて)

[原因・理由] 竹の中におはするにて知りぬ (によりて)

これにてこそしりぬれ (によりて)

「にて」が何であるかは、これで分かった。

(今日でも「今にして思えば」のような形で「今にして」という形式を使用するが、これは「今にありて」であると解釈することができる。「彼にしてみれば」「四十にして惑わず」でも同様である。)

③「で」の誕生を構造で示す

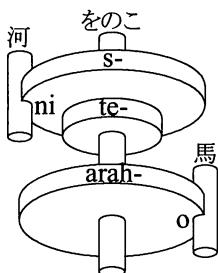
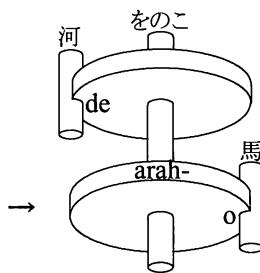
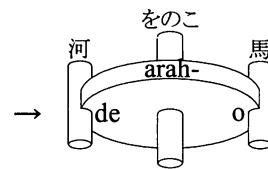


図11-28再掲「にて」

図11-30 河で馬あらふ図11-31 河で馬あらふ

「で」はこの「にて」の構造(図11-28)から生まれた。「にて」の次に過渡的な格の「で」(図11-30)が生まれ、それがなかつぎとなって現在の「で」格(図11-31)が誕生したものと考えることができる。

④「で」は「に(あり)て」「に(より)て」に還元できる

本節冒頭に引用した例文もすべて「にて」、さらに「にありて(において)」ないし「によりて」に還元することができる。

- (1)場所を示す。「砂場 にありて あそぶ」
- (2)手段・方法を示す。「鉛筆 にあり(より)て 書く」
- (3)材料・原料を示す。「紙 にあり(より)て 作る」
- (4)原因・理由を示す。「病気 にあり(より)て 休んでいる」
- (5)時間・期間・年齢・金額・数量などを示す。「あと一時間 にありて 終わる・六十歳 にありて 退職した・千円 にあり(より)て 買う」

(6) もとづくところを示す。「規則 にあり(より)て 許されている」

(7) 主体を間接的に示す。「警察 にあり(おい)て 原因を調べている」

(8) 状態を示す。「すごい速さ にあり(より)て 飛ぶ」

また、国文法のいわゆる助動詞「だ」の連用形の場合、「あちらは弟で、こちらが兄だ」という例では、

「あちらは弟 にありて、こちらが兄だ」

と還元できる。

ところで、「9時で店を閉める」のような場合は、たとえば次のように、それなりの動属性を設定したほうがより理解しやすくなるものもある。

「9時にあり(至り)て店を閉める」

◎以上から、「格一動詞ーて」は格同様の機能を持つことがあるといえる。

⑤ 「って (≒と)」 ← 「とて」

『土佐日記』の冒頭にこのような文がある。

男もするる日記といふものを、女もしてみむとてするなり

この文にある「とて」は「格助詞+接続助詞」の構成で、構成という点では「にて」と同じである。この「とて」は「と言って」等から生じたものと考えられる(『日本文法大辞典』参照)。

「とて」 ← 言って, と思って

「にて」からは新しい格「で」が生じたが、こちらからは口語的な格詞「って」が生じている(-tote → -tte)(図11-32→-33→-34)。

彼女、これ読んだって言ってる。(図11-34)

この店がいちばんおいしいんじやないかって思いますけど……

しかし、この「って」は容易に「と」に置き換えられるので、「で」の場合と異なり、新たな格として認識されるには至らなかった。格は「と」格のままで、格詞だけが口語的変形を生じたものとして、つまり構造的な変化ではなく、音韻上の変化としてのみとらえられている。

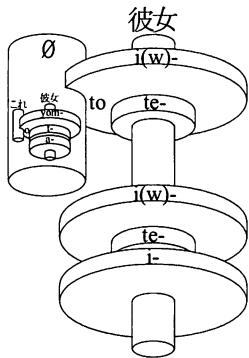
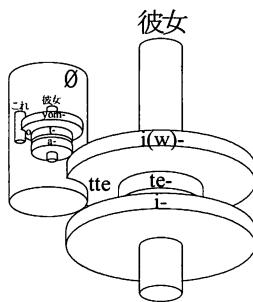


図11-32 読んだとて言ってる → 読んだって言ってる → 読んだって言ってる

図11-33



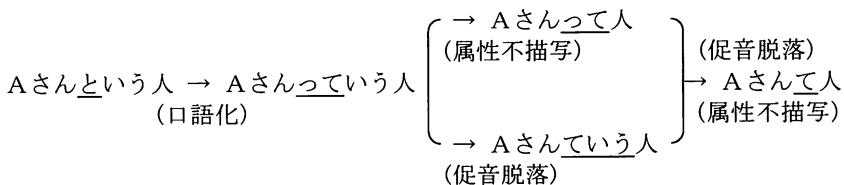
= 読んだと言ってる

図11-34

また、「って」には次のような使い方がある。

Aさん(っ)て人、知ってる？

※ここでは「話題」(3.5⑫参照) 提示が行われているが、「人」が省略されて「(っ)て」だけになっても話題提示機能は存続する。 「って」に名詞修飾機能があるはずはないので(ただし、42.2 参照)，これは次のような変化、つまり、構造的な変化ではなく、描写上の音韻的な変化によって生じたものと考えられる。描写上の縮約が進んでも、構造は保たれており、意味は「という」を保っている(図11-35)。



そして、さらに「人」まで省略されてとりたて詞のようになる場合もある。

Aさん(っ)て__、知ってる？

さらに、ちなみに言えば、一方で次のような変化も生じている。これも、まったく描写上の音韻的な変化であって構造は元のままである(図11-36)。

Aさんていう人 → Aさんちゅう人 → Aさんつう人
(t口蓋化縮約) (非口蓋化)

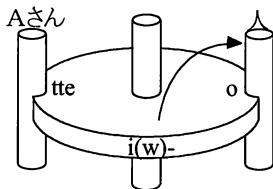


図11-35 Aさんていう人
Aさんっていう人
Aさんていう人
Aさんていう人
Aさんて

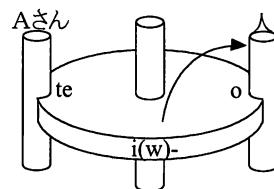


図11-36 → Aさんていう人
Aさんちゅう人
Aさんつう人

「さん」は(待遇)描写詞(5.2④)

「人」は主格に置くことも考えられる。

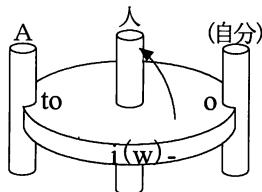


図11-37 A(さん)という人

◎ 「(っ)つう」つつう動詞、誕生？

「来る」つつわないのでね。

「来る」つつってたよ。

「来る」つつうなよ。

「来る」つつう人なんていない。

「来る」つつえばいいじゃん。

⑥ このような変化を生じなかった格

「にて・とて」は発生したが、「がて・をて・へて・からて・よりて」は発生してもよさそうなのに、実際には発生しなかった。この相違はおそらく次のような事情によるのだろう。

「に」格は、時・所・原因等、「一点」の原意より拡張した意味を表すものが多く、また、「と」格は発話や思考の内容を表す場合が多い^{*1}。共に動属性との結びつきに傾向性があり、この両者は「基」となりやすかった。ところ

*1 動作を共同にする場合にも「と」を用いるが、これは起源的に同一であるか否か疑わしい(『岩波古語辞典』p.1490)。

が、「が」「を」両格ではそのような傾向性がない。したがって「基」となりにくかった。

「へて」（「～へ行って、～へ来て」）の場合は（移動の目的地表示という）傾向性はあるものの、意味的に「にて」（「～にありて」）と類似している（目的地に達して／行動地で）ので「にて」で代用できたのであろう。「からて・よりて」の場合は「～から/より来て」であり、到達以後の局面を述べるのに起点をセットにする必要性は低いので「基」にはなりにくかったのであろう。

このような理由から「にて・とて」以外には「格詞+て」の形式が生まれなかつたものと考えられる。

11.6 日本語本来の格

「で格」は平安時代に生まれたものであった。ということは、奈良時代にはなかつたわけである。いったい日本語の古い格の姿はどんなものだったのだろうか。このことについて考えておきたい。

①主格……元来日本語には動き・状態の主体を表す格（主格）を明示する格詞は存在しなかつた。ある属性があれば、それに対する主体があるのは当然のことなので、わざわざ格詞により明示する必要はなかつた。しかし、室町時代以後、主格詞「が」が使用されるようになった（『岩波古語辞典』p. 1487）。

「構造伝達文法」では3種類の主格を設定している。第1の主格にはいまだに格詞は存在していないと考えており、室町以後主格詞として機能するようになつた「が」は、第2、第3の主格を表示する格詞であるととらえている（2.2）。第2主格は「が」が現れる前には一部「を」で表示されていたとも考えられるが、詳しい検討が必要である（『発展A』A2.4 2), 3)）。

	奈良	室町	現代	
主格	第1主格	Ø	→	
	第2主格	Ø（を）	が	→
	第3主格	Ø	が	→

図11-38

② 目的格……本来の日本語では目的格には助詞を要しなかった(『岩波古語辞典』p. 1489参照)。他動詞的な属性では目的語があるのは当然のことなので、わざわざ格詞を用いて明示する必要はなかった。しかし、表現上の論理性が意識され始めた結果、対象を確認する用法をもっていた感動詞「を」が目的格表示の機能をもつようになり、漢文訓読を通じて定着するようになった。

「を」は元来なくともすむものなので、現代でも話し言葉では使用しないことが多い。

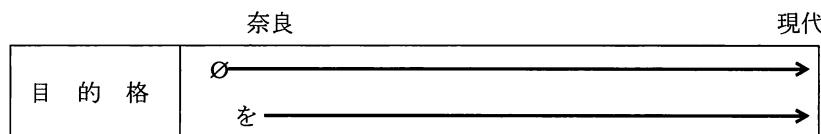


図11-39

なお、「を」はもともと感動詞であり、目的語を表示するものではなく、単に対象を確認するにすぎなかつたものなので、常に目的語を示すようになってはいない。「瀬を早み…」(古典語)では主体を表し、「道を行く・橋を渡る」では経由地を示し、「世をすねる・何をあわてて…」では原因を示している。(A 2章参照)

③ 「に格」……動作の生起・存在する場所を示す。非常に重要な役割をもち、略されることは極めて少ない。使用度数も多く、種々の用法を展開している(『岩波古語辞典』p. 1488参照)。

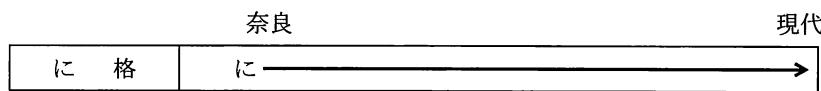


図11-40

主格・目的格のように動詞に必須の格は、わざわざ格詞を用いて明示する必要はなかった。当然のこととしてそれと知れたのである。「に」は非常に重要な格ではあるが、動詞に必須のものではなかつたため、格詞により明示されざるをえなかつた。このため略されることは極めて少なく、使用度数が多くなつたものと考えられる。

④「へ格」……平安時代中期以前は、移動性動作が話者のいる地点から遠く離れた目標・方角へ向かう意を示す。院政期には、すべての移動性動作の目標を示す用法が生まれる。鎌倉時代には、到着点・対象を示す用法が生まれる。室町時代には、場所を示す用法が生まれる。（『日本文法大辞典』、『日本語文法大辞典』参照）

	奈良	室町	現代
へ	遠い目標 移動目標	へ →	へ →
格	着点・対象	へ →	へ →
	場 所	へ →	

図11-41

⑤「で格」……平安時代中期に生まれた(11.5に詳しく述べた)。

	奈良 平安中期	現代
で 格	で →	で →

図11-42

⑥「と格」……奈良時代にすでに存在していた（『日本文法大辞典』参照）。

	奈良	現代
と 格	と →	と →

図11-43

⑦「から格」……「から」は奈良時代に体言から助詞へと転ずる過渡期にあった(36.9 参照)（『日本文法大辞典』参照）。

	奈良	現代
から 格	から →	から →

図11-44

⑧「より格」……奈良時代から使われている。同系の語「ゆ・ゆり・よ」は平安時代には使用されなくなる(『日本文法大辞典』参照)。

奈良	現代
より格	より →

図11-45

⑨「まで格」……「まで」を(格助詞でなく)副助詞とするのは山田孝雄の説に基づくのであるが、「より・から」と相関して用いられる場合には、上にくる語句に格を与える働きをもっていることは疑いない。松尾捨治郎、時枝誠記も同趣旨である(『助詞助動詞詳説』p. 528参照)。この「まで」は奈良時代には格表示形態としてすでに出現していた(同書p. 526(1)参照)。(36.9も参照されたい。)

奈良	現代
まで格	まで →

図11-46

⑩「 \emptyset_2 格」……この格については2.7に述べた。この格は国語文法では第1主格(\emptyset_1 格)同様正当な扱いを受けてこなかったので、辞書・辞典類には格としての記述がない。しかし、用例は多い。一例を挙げておく。

朝獵(アサカリ)にいま \emptyset_2 立たすらし (万葉集3)

馬並(ナメ)めて朝 \emptyset_2 踏ますらむその草深野 (万葉集4)

今年 \emptyset_2 行く新島守(ニヒマモリ)が麻衣 (万葉集1265)

昨日(キツフ) \emptyset_2 見て今日こそへだて吾妹子が (万葉集2559)

去年(コソ) \emptyset_2 焼けて今年作れり (方丈記・ゆく河)

奈良	現代
\emptyset_2 格	\emptyset_2 →

図11-47

◎ 主格・目的格の特殊性

以上から、主格・目的格(を格)、それに「 \emptyset_2 格」が他の格と様相を異にしていることに気がつく。つまり、他の格では格詞の存在がすなわちその格の存在を意味しているのに対し、主格(第1主格)・目的格(を格)・ \emptyset_2 格では、格詞の存在の有無に関わらず、その格が存在している。ここでは、 \emptyset_2 格については保留し、主格・目的格の特殊性について述べる。

主格と目的格が格詞の有無と関係なく存在しているのは、動詞が必ず主体をもち、多くの場合目的語となる客体をもつという動詞の性質そのものに關係がある。動詞があれば、その動詞の主体と目的格客体が存在することは自明のことなのであるから、特にそれをわざわざ格詞を用いて明示する必要はない。

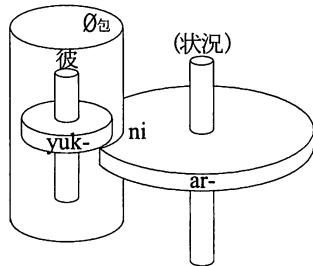
しかし、主格実体と目的格実体が共に有情物である場合など、どちらが主体でどちらが客体であるかを明示しないと意味が混乱するような場合もある。その場合には、主格ではなく目的格の方を格詞「を」を用いて表示することになった。特に書き言葉ではこの格関係を明示しようとしている。口語で混乱が起きない場合は「を」はないことが多い。主格の方は……第1主格であるが……明示しようにも格詞が存在していない。

第1主格詞は現在に至ってもなお存在していない。これは第1主格詞が存在する必要がなかったことを意味している。存在しなくとも第1主格の存在を「は」(や他の係助詞)が補って示してくれたし、場合によっては、ともかく主格を表示する「が」で言い換えることもできた。このため日本人は第1主格詞の存在しないこと、ひいては第1主格の存在そのものにまったく気がつかなかつた。(ゼロとガの違いが、ハとガの違いとしてとらえられてきた。)

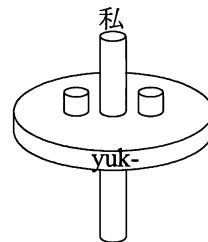
以上のようなことから、「主格」と「を格」が動詞に対する重要性において他の格と異なるということを、特に「主・を格」と呼ぶことによって表現することにする。

条件表現の構造

『発展 A』 A6章, A8章参照

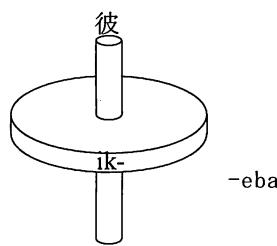


-a (ba)

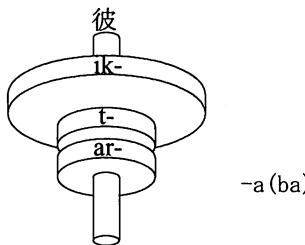


私
yuk-

図A 彼が行くなら yuk-u θ包-n =ar-a (ba), 図B 私も行く

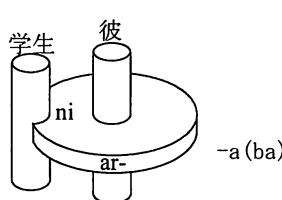


-eba



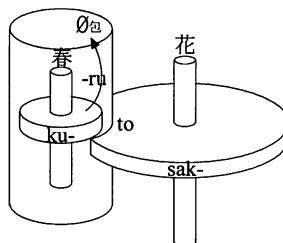
-a (ba)

図C 彼が行けば ik-eba, 図D 彼が行ったら ik-i=t-θ=ar-a (ba)



-a (ba)

図E 彼が学生なら～
学生-n =ar-a (ba)



図F 春が来ると花が咲く
ku-ru θ包-to